

駒場の古典籍

東

養

平成30年11月8日[木]～11月28日[水]

会場：東京大学駒場図書館ロビー

主催：「駒場の古典籍」展示チーム

後援：古典の日推進委員会



開催にあたって

東京大学教養学部国文・漢文学部会には、旧制第一高等学校・東京高等学校の旧蔵書、および東京大学教養学部において購入された書物が保管されています。昨年6月の「一高・東高の古典籍」展に続き、今年は駒場キャンパス所蔵の古典籍について総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化コースの大学院生達と調査し、各自の関心に近い書物に解説を付して「駒場の古典籍」として展示いたします。解説キャプションや目録の準備にあたったのは、今学期の大学院演習授業「基層文化形成論I」のメンバーである、川下俊文（博士課程3年）、佐藤嘉惟（同2年）、高原智史（修士課程2年）、田中希望（同1年）、藤子君（外国人研究生）の各氏と担当教員の私で、展示は授業の成果発表の場でもあります。

展示資料には、『第一高等学校六十年史』（1939年）に稀観本として紹介される朝鮮本『朱子語類大全』（乾隆36（1771）年刊）や、東京高校の黒木勘蔵教授のコレクション「黒木文庫」の一部、東京大学教養学部で購入された院政期書写の『二教論勘文』および『金剛頂経』なども含まれます。

これまで東京大学OPACにも載っていなかったこれらの資料の中には、一昨年度の秋から始まった駒場図書館による資産登録および遡及登録とその準備作業を通じていわば「再発見」されたものもあり、丁寧に登録作業を進めて下さった図書課図書係とナカバヤシ株式会社の皆様に御礼申し上げます。

展示期間は、平成30年11月8日（木）～11月28日（水）の図書館開館日です。11月1日の「古典の日」にも近く（今年は『源氏物語』の存在が初めて文献に記されてから1010年目にあたります）、「古典の日推進委員会」の後援を得ています。小さな展示ですが、お楽しみいただければ幸いです。

平成30年11月8日

東京大学大学院総合文化研究科・
教養学部国文・漢文学部会准教授
田村 隆

目次

開催にあたって	田村 隆	1
解説 ～古典籍の来歴と環境～		3
一高の来歴と国語教育	高原 智史	
一高の蔵書形成について	高原 智史	
東京高等学校略史	川下 俊文	
黒木文庫と待鳥文庫	川下 俊文	
山水会と杉敏介	田村 隆	
ピックアップ		
第一高等学校時代に加わった古典籍		8
朱子語類	高原 智史	
和歌懐紙土代・肩拔鹿事	佐藤 嘉惟	
文久元年露船対州碇泊中の日記	田中 希望	
東京高等学校時代に加わった古典籍		11
絵本京白粉	川下 俊文	
教養学部時代に加わった古典籍		12
金剛頂一切如来真実摂大乘現証大教王経	佐藤 嘉惟	
二教論勘文	田村 隆	
色葉口伝・古今集真名序	佐藤 嘉惟	
清俗紀聞	藤 子君	
展示品キャプション一覧		16
展示品書誌		(一)

一高の来歴と国語教育

大学の付属としてあった東京大学予備門が高等中学校へと転換し、大学からは独立した学校となったのは 1886 年（明治 19）のことだった。このとき、大学の側は東京大学から帝国大学へと変わっている。1889 年に第一高等中学校は一ツ橋の地から帝国大学に隣接した本郷向ヶ丘に移転した。一高の別名が「向陵」であるのは、向ヶ丘の地名に由来する。

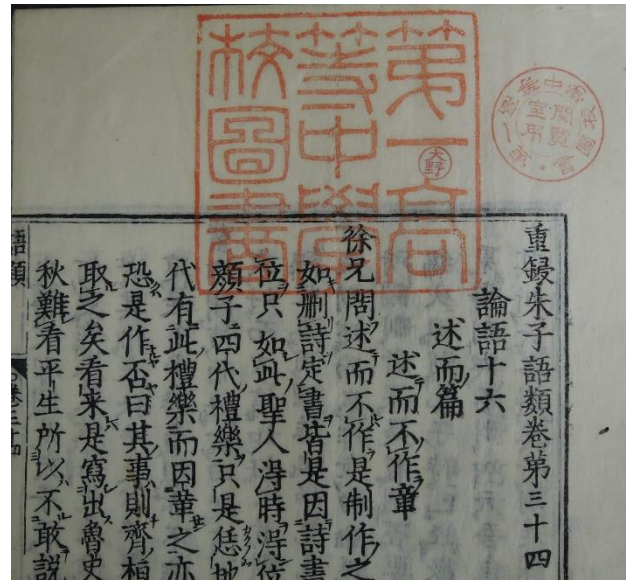
1894 年には法令改正により高等中学校が高等学校に改められ、第一高等学校となる。（第一高等中学校時代と、第一高等学校時代の蔵書印を右にお示しする。第一高等学校時代の蔵書印には大小二種がある。見比べられたい。）

駒場の地には明治初年から駒場農学校があり、その後は大学の農学部となっていたが、大学には学部を本郷地帯一ヶ所に集約したい意向があり、1935 年（昭和 10）に一高と大学の間で用地交換の話がまとまって、一高は駒場へと移転した。

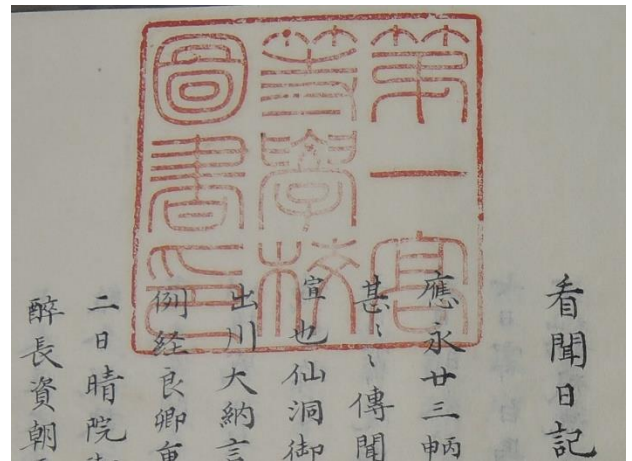
戦後、旧制高校は廃止が決まり、1950 年 3 月をもって一高の歴史には終止符が打たれた。その後は、すでに 1949 年に発足していた東京大学教養学部へと引き継がれる。

* * *

さて、学課における旧制高校の特徴といえば、その猛烈な外国語教育が挙げられるが、国語教育はどうなっていたのか。1886 年（明治 19）の第一高等中学校発足の時点で、第一外国語四時間、第二外国語五時間に対して三時間だった国語及漢文の授業時間数は、時勢とともに増やされたり、減らされたりしつつも、確固たる地位を保ち続けた。1891 年時点の国文の授業は、予科では文法を学びつつ、徒然草、土佐日記を読み、本科では大鏡、今昔物語、宇治拾遺物語を読んでいた。国文は国史とセットで教えられていて、「歴史ニ文章ヲ兼テ講授ス」と言われてい



第一高等中学校時代の蔵書印。
右側の丸印には「第一高等中学校図書閲覧室用」とある。



第一高等学校時代の蔵書印（大）。



第一高等学校時代の蔵書印（小）。
右側の角印には「第一高等学校図書閲覧室用」とある。

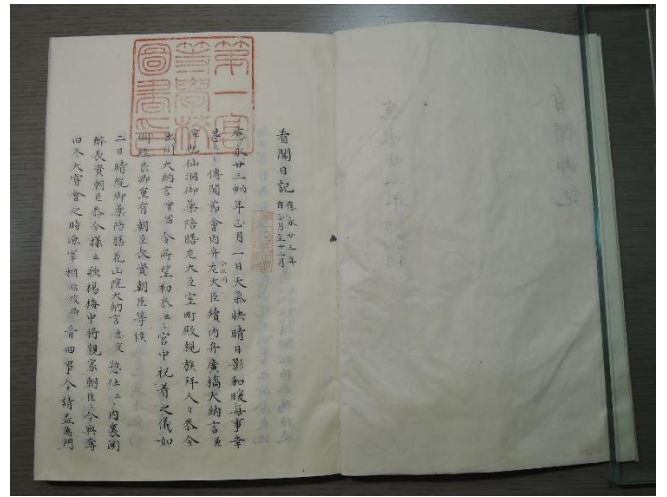
た。教科書として、当時の一高の国文教授陣が執筆した書籍（久米幹文『日本文彙』、小中村義象『日本制度通』など）が使われていた。（『第一高等学校六十年史』1939 年、96～99 頁）

（高原智史）

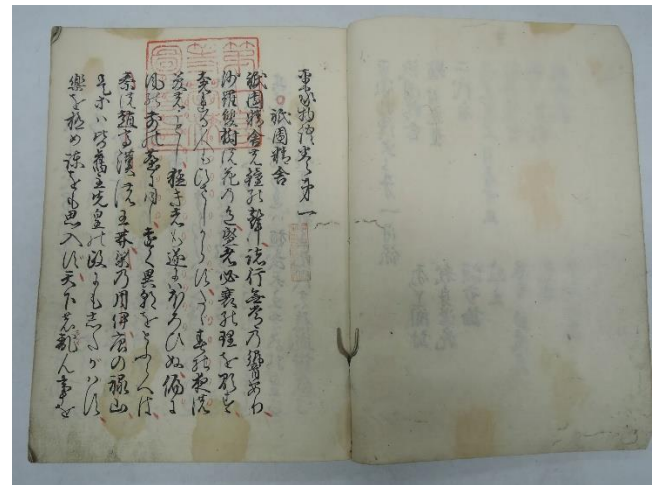
一高の蔵書形成について

やがて「駒場」へと至る、一高図書館の蔵書形成は学校の編成替えと共にあったといつてよい。1877年（明治10）、東京大学が発足したが、大学は東京英語学校を包摂して東京大学予備門とし、同校の蔵書も受け入れることとなった。1886年、東京大学は帝国大学へと移行したが、予備門は大学から独立して、第一高等中学校となった。このとき、大学から第一高等中学校へ多数の書籍が移管されている。『帝国大学年報』によれば、その数は和漢書 9906 冊、洋書 16137 冊。これとは別に、帝国大学に合併された工部大学の旧蔵書から和漢書 2853 冊、洋書 2971 冊が第一高等中学校へと送付されている。合わせて和漢書 12759 冊、洋書 19108 冊となり、これが第一高等中学校の蔵書の出発点となった。『第一高等学校六十年史』（1939年）によれば、1938年3月末の段階で一高図書館の蔵書は和漢書 39785 冊、洋書 18040 冊となっている。東京帝大の図書館は関東大震災で壊滅的な被害を受けたが、一高ではその難を免れ、蔵書を保持した。

1890年（明治23）から一高では『校友会雑誌』が発行されるようになったが、1893年の27号から、図書館の新着図書を報じる記事が断続的に載るようになり、1910年の196号まで続いた。これは洋書、和漢書と購入、寄贈とに分かれたリストであるが、書目、冊数、刊行年、寄贈者等を伝えていて、貴重なリストとなっている。興味深いものとして、一つに『看聞御記（日記）』の写本がある。1894年の42号に、巻六から巻十が購入されたことが記されている。1895年の47号には、巻一から巻五が一高の国文学の教授を務めた故久米幹文教授の遺族から寄贈され、巻十一から巻二十が購入されたことが記されている。同じく1895年の50号には巻二十一から巻四十三が購入されたことが記されている。第二に、

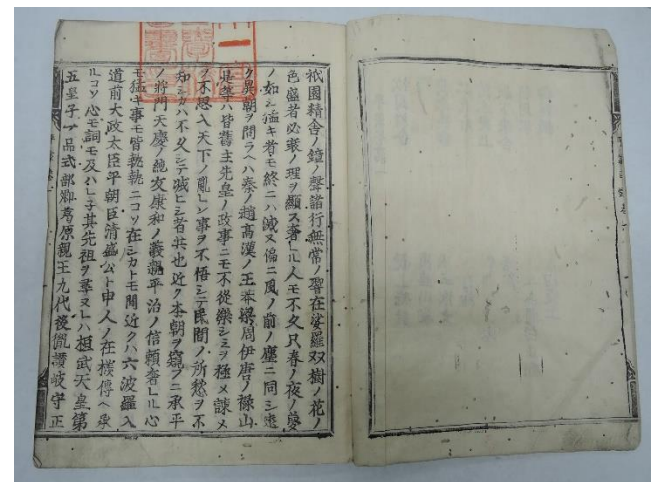


『看聞日記』巻一（請求記号 三:い:61）



『平家物語』巻一

（下村時房刊本、渡辺修斎旧蔵、請求記号 三:い:236）



『平家物語』巻一

（双辺12行片仮名本、請求記号 三:い:32）

1899年の85号に出ている「嗟峨本」とされた『平家物語』がある。これは『第一高等学校六十年史』351頁にも、「古活字本」の『平家物語』と並んで稀覯書として挙げられている。これら二つの資料は共に現在は駒場図書館に所蔵されている。（高原智史）

東京高等学校略史

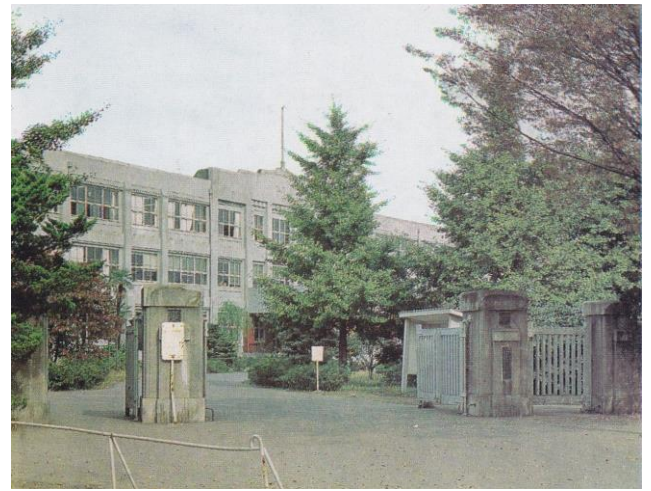
旧制東京高等学校（東高）は、官立七年制高等学校として1921年（大正10）11月9日に設立され、翌年4月より授業を開始した。従来の五年制中学校に相当する尋常科四年と、三年制高等学校に相当する高等科三年から成る、いわば中高一貫校であった。

旧制高等学校の起源は、帝国大学入学希望者に予備教育を施す「大学予備門」にあった。それが「高等中学校」を経て、1894年（明治27）の第一次高等学校令により三年制の「高等学校」に改称されたのである。この法令において、高等学校は大学予備教育だけでなく専門教育をも担うよう定められたが、実際には依然として、大学進学を前提とするエリートコースの一部として機能し続けた。専門教育の場としては別に専門学校が設置されることになり、高等学校令の趣旨は十分に達成されなかった。

1918年（大正7）に制定された第二次高等学校令では、大学予備教育だけではない高等普通教育の場として高等学校を再定義し、従来の中学校と高等学校を合わせた七年間で、一貫した教育を施すよう意図した。これ以降、法令上は七年制高等学校が原則となり、三年制は変則とされたのである。官立の東京高等学校は、このような新しい高等学校の姿を示すモデルケースとなるべく誕生した。

初代校長には、東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）・東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の校長を歴任したベテランの湯原元一が就任し、第一高等学校（一高）に代表されるバンカラの気風とは一線を画する、スマートな校風を確立した。著名な卒業生には朝比奈隆、網野善彦、家永三郎、糸川英夫、串田孫一、清水幾太郎、瀬田貞二、日高六郎、星新一、山本達郎、吉田満などがいる。

開校当初は、中野での新校舎建設を急ぐかわら、仮校舎として神田一ツ橋の東京外国語学校（現東京外



東京高等学校本館（『東京高等学校史』より転載）

国語大学）旧校舎を使用した。開校からわずか一年半後の1923年9月に関東大震災で焼失した。同年11月に中野へ移転、1925年1月には本館が落成し、東高の歴史のほとんどがここで築かれた。新校舎は鉄筋コンクリート3階建、寄宿舍は1人1室のモダンな洋室で、やはり一高とは対照的である。しかしこれら東高の校風を象徴する建築も、1945年5月25日の空襲で被災し、戦後は駒場の一高寄宿舍や校舎を間借りして授業を続けた。1947年4月に、高等科は三鷹の中央航空研究所跡地へ移転し、尋常科は中野校地へ戻った。

ところが戦後の教育改革によって、旧制中学校は新制中学校・高等学校へ、旧制高等学校は新制大学へと改組されることとなった。そのため、旧制の中高一貫校であった東高は解体を余儀なくされ、尋常科は東京大学教育学部附属中学校・高等学校（現中等教育学校）となり、高等科は一高と合併して東京大学教養学部を構成した。現在、中野校地は附属中等教育学校、三鷹校地は三鷹寮となって、ともに東京大学へ継承され、神田仮校舎跡地には学士会館が建っている。一高に比べると知る人の少ない東高であるが、後身である東京大学教養部に学ぶ我々は、そのユニークな存在を記憶にとどめておくべきであろう。

（川下 俊文）

【参考文献】 小柳篤二〔著〕『東高小史』（私家版、1965稿、1970刊）。東京高等学校史刊行委員会〔編〕『東京高等学校史』（東京高等学校同窓会、1970）。

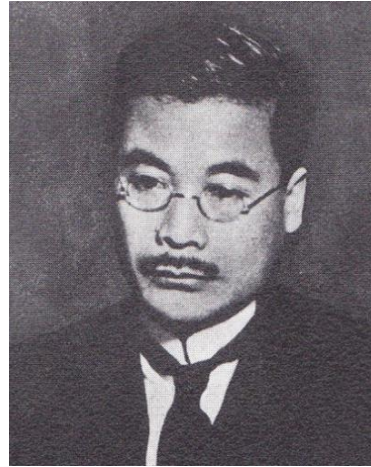
黒木文庫と待鳥文庫

東京高等学校高等科が1925年(大正14)に開設された際、初代校長湯原元一によって招聘された教授陣のなかに、国語科の黒木勘蔵・待鳥清九郎がいる。両教授はともに在職10年に満たず急逝したが、その蔵書は東高へ寄贈されて黒木文庫・待鳥文庫となり、1945年の空襲をも奇跡的に生き延びた。現在では東京大学教養学部国文・漢文学部会へ引き継がれ、今日まで長く学恩をもたらしている。

黒木勘蔵(旧姓福田、1882-1930)は長野県出身。早稲田大学文学部で西洋哲学を専攻したが、卒業後に同郷の先輩・高野辰之の勧誘で近世邦楽研究に転じ、東京音楽学校の嘱託を受けて『近世邦楽年表』全3冊(六合館、常磐津富本清元之部1911、江戸長唄附大薩摩浄瑠璃之部1914、義太夫節之部1926)を完成させた。音楽学校長を務めていた湯原は黒木の尽力を高く評価し、東高教授への抜擢に至った。授業では近世文学を講じ、訥弁ながら真摯な授業態度と博識によって慕われ、また酒豪としても知られた。ほかに東高図書課長・早稲田大学講師を兼任した。

黒木の最大の業績は『近世邦楽年表』編纂であるが、ほかにも高野と共同で『近松門左衛門全集』全10巻(春陽堂、1922-1924)、『元禄歌舞伎傑作集』上下(早稲田大学出版部、1925)などを編纂し、近世邦楽・演劇研究のための基礎資料を提供した。また、これらの編纂作業を通じて膨大な量の浄瑠璃本・番付を調査した経験を活かし、浄瑠璃史研究という分野を開拓していった。著書に『近世演劇考説』(六合館、1929)・『浄瑠璃史』(青磁社、1943)などがある。

黒木文庫は約2000冊に上り、浄瑠璃や歌舞伎を主とした近世邦楽・演劇資料を中心とする。今回の展示では『仮名手本忠臣蔵』を題材に、浄瑠璃と歌舞伎との影響関係を示す資料を抜萃した。黒木文庫蔵書の多くは「電子版黒木文庫」(<http://kuroki.dl.itc.u->



左) 黒木勘蔵教授
(『江戸の声』より転載)



右) 待鳥清九郎教授
(『故待鳥教授追憶記念誌』より転載)

tokyo.ac.jp)としてインターネットに公開されているが、今回展示される『催馬楽註秘抄』『梁塵愚案抄』(展示No.12-14)のように未収録のものもある。

待鳥清九郎(旧姓津留、1888-1933)は福岡県出身。東京帝国大学文学部国文学科を卒業後、台湾総督府国語学校・京都府立第二中学校・陸軍中央幼年学校・第四高等学校の教員を歴任し、文部省図書監修官を経て東高教授に就任した。授業では中古・中世文学を中心に講じた。主要な業績に『東関紀行』校註(広文堂、1929)がある(展示No.19)。待鳥文庫は約1800冊あり、なかでも軍記物が約150冊を占める。

(川下 俊文)

【参考文献】 待鳥清九郎ほか[著]『故待鳥教授追憶記念誌』(東高国文学会、1934)。東京大学教養学部[編]『東京大学教養学部国文学研究室所在和漢書分類目録』(東京大学教養学部、1979。初出:『東京大学教養学部人文科学科紀要』68号、1978)。黒木文庫特別展実行委員会[著]ロバート キャンベル[編]『江戸の声—黒木文庫でみる音楽と演劇の世界—』(東京大学大学院総合文化研究科・教養学部美術博物館、2006)。

山水会と杉敏介

『山水会旅行記』(展示 No.21)の展示キャプションにも記したが、「山水会」は教養学部の国文・漢文学系教員の集まりの名で、今日まで続いている。旧制第一高等学校の教授・校長を務めた杉敏介によって1931(昭和6)年に命名された。

守随憲治編『真の教育者 杉敏介先生』(新樹社、1973)には杉敏介自筆の「一高山水会記」の載る冊子『一高山水会誌』の写真が載っているが、残念ながら所在不明である。同書より引用する。

一高国語漢文科同人 毎春相携へて勝地に遊ぶ
事既に久しく 数ふれば殆と二旬年に垂んとす
而も未た会名を有せず 今茲函嶺万翠楼に遊ぶ
や 談偶々之に及ぶ 予日水清くして山翠なり
山水会となす如何 或人曰く好し 山水音三酔
に通ず 夕に飲みては玉山崩れ 朝に酌みては
微醺を帯び 昼傾けては仮睡を催す 一日三た
び酔ひて興趣函泉と与に尽きず 山水の清遊を
縦にするのみならず 更に三酔の雅趣を味ふ所
可ならずやと 衆手を拍て之に和し 会名即定
まる 仍て之が記を作る

この「一高山水会記」は杉敏介の歌集『南山歌集』(杉先生喜寿記念歌集出版会、1949)にも収められている。退官後の歌にも山水会に触れたものが見られる。

新緑の頃とはなりぬ山水の清きつどひの偲ば
るゝかな
箱根熱海湯河原かけて諸共に遊びし折の嬉し
さ楽しさ (1946年5月下旬)

1953(昭和28)年1月には、山水会によって『源氏物語』の教科書が編まれた(矢島書房刊、葵・賢木の2巻が1冊に収められている)。今学期の授業(人文科学ゼミナール「山水会教科書で読む『源氏物語』葵巻」)でも用いている。



杉敏介蛙歌碑(山口県岩国市周東町)

東京大学教養学部山水会として、麻生磯次、守随憲治、阿部吉雄、鶴見誠、金子武雄、五味智英、市古貞次、市川安司、阿部秋生の各氏の名が記されている。「はしがき」には、「吾々の集りを山水会という。これは元の第一高等学校の国漢科教員間にできた懇話会であつた。懇話と共に常に、時代の教育に対する検討をし、対策を練つていたつどいであつた。発生は数十年の昔に遡る。(中略)時移り人改まつて、会はそのまゝに今に及んで、その態度に変わりはない。乃ち会として先づ新制大学の教育に対する教材を提供する方針をたて、意図するところを発表することとした」とある。さらに、同年3月には『芭蕉紀行集』も編まれている。『山水会旅行記』冒頭の伊豆古奈旅行が同年11月であるから、教科書二編の刊行祝の意味合いもあつたのではなかろうか。

杉敏介については2014年に駒場博物館の所蔵品展「饅頭・柏・オリーブ 山口進の画業と交友」で関連資料が展示された。その中にも「蛙図」があるが、杉は「力なき蛙に力見出でしは人の誠の心なりけり」という歌を好んだ。夏目漱石『吾輩は猫である』の津木ピン助のモデルとしても知られる。ちなみに、杉校長時代に教頭を務めたのは西洋史の齋藤阿具教授で、ドイツ・オランダ留学から持ち帰って植えたオリーブの木が今も駒場キャンパスに残る(拙稿「一高のオリーブ」『東京大学環境報告書2018』2018年9月、デジタル版が公開されている)。(田村 隆)

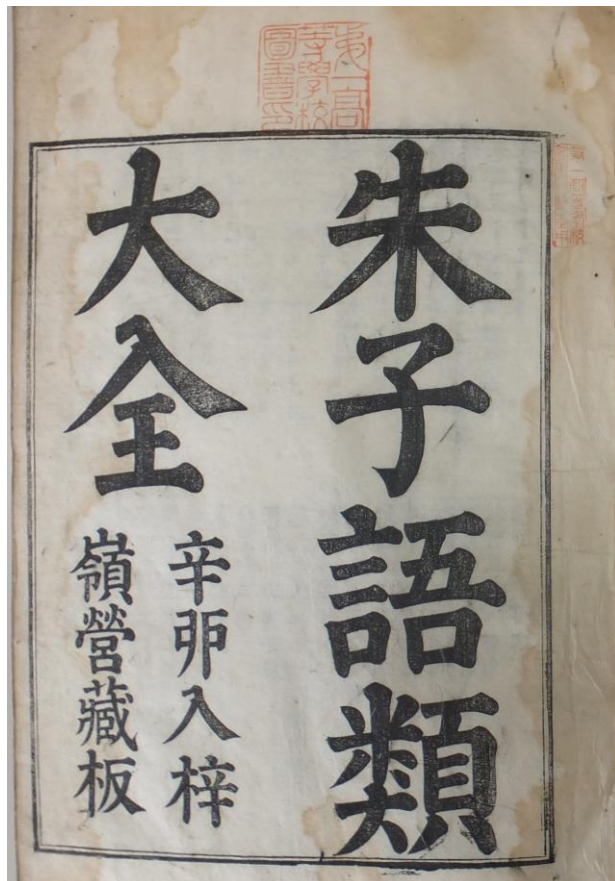
朱子語類 140 卷

展示 No.1

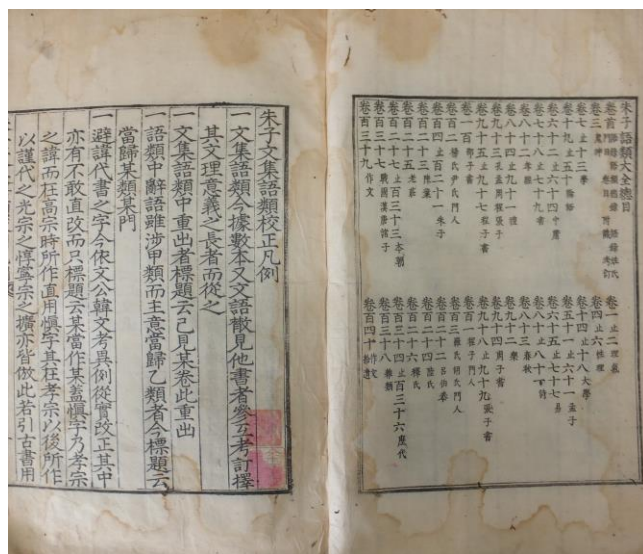
1771 (乾隆 36) 刊 40 冊

『朱子語類』は、12 世紀の南宋を生きた朱熹 (1130-1200) と門人との問答録である。孔子の問答録が『論語』なら、『朱子語類』は朱熹の問答録である。朱子学を知るための資料として重要である他、当時の口語ないし俗語で書かれていることから、宋代中国の言語サンプルとして、言語学の観点からも重要視されている。現行の『朱子語類大全』百四十巻は、1263 年 (景定 4)、黎靖徳がそれまで出回っていたテキストを再編集し、1270 年に刊刻したものである。朱子学は本国中国の他に朝鮮や日本にも浸透し、特に朝鮮では中国同様、体制教学にまでなつたとされる。そのような中で、『朱子語類』は重要な書物として、広く読まれ、朝鮮や日本でも『朱子語類』が刊行された。本品は朝鮮で 1771 年に王朝の命を受けて洪啓禧が刊行したものである。この刊本の特徴は、毎巻末に「考異」が載せられ、それに該当する本文の右傍に点が付されていることである。また展示されている実物を見られた方にはお分かりのことかと思うが、かなりの大判で (寸法 37.4×24)、持ってみると、ずっしりと重い。

一高に搬入された時期は特定できないが、「第一高等学校図書印」があることから、第一高等学校になってから、すなわち 1894 年 (明治 27) 以降、さらに、「一高の蔵書形成について」で紹介した、一高の『校友会雑誌』に断続的に掲載された図書館の新着雑誌のリストに見られないことから、そのリストが掲載されなくなった 1910 年以降、おおよそ大正期頃に一高には搬入されたものとみられる。24 冊目だけは後補の写本である。1939 年の『第一高等学校六十年史』には同校所蔵の稀覯書として紹介されており、重要視されていたことが分かる。



第 1 冊目 1 丁表。上部には「第一高等学校図書印」が捺されている。



第 1 冊 1 丁裏～2 丁表。2 丁表の右下には 2 つの蔵書印が捺されており、藤本論文によれば、上下それぞれ「清／風」、「金鍾／秀印」で、同一人のものだという。前の所蔵者のものだと思うのだが、詳細は不明である。

【参考文献】 岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」(『岡田武彦全集第 16』、明德出版社、2008。初出『和刻本 140 巻』中文出版社、1973)。藤本幸夫「朝鮮版『朱子語類』攷」(『富山大学人文学紀要』第五号所収、1981)。

(高原智史)

和歌懐紙土代・肩抜鹿事

展示 No.4

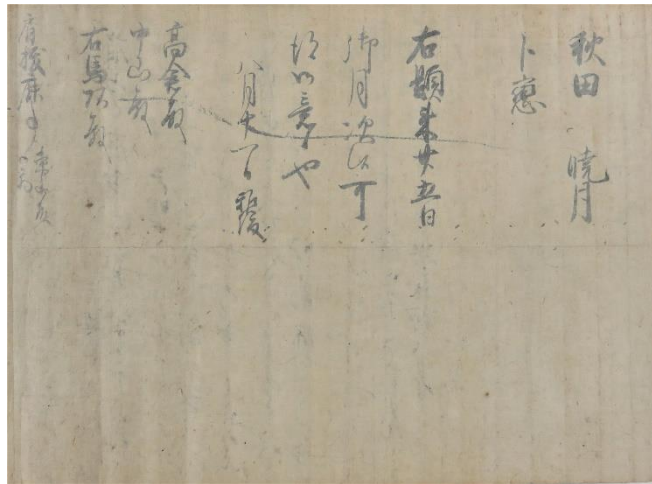
〔室町時代後期〕 写 1軸

飛鳥井雅俊（1462～1523）による和歌懐紙の草案と書状の草案とを、江戸時代後期に合わせて1軸に仕立てたもの。

公家の中でも和歌と蹴鞠の家として知られる飛鳥井家は、雅縁（1358-1428、展示 No.3）が室町幕府第3代将軍の足利義満の信任を得たことを契機に、歌道師範の家として活躍することとなった。教養学部は「飛鳥井家和歌関係資料」7点として、1936年（昭和11）に古書肆の巖松堂から購入された資料を所蔵している（「第一高等学校旧蔵資料教育用掛図 和軸物目録（4 歴史）」参照。<http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ichiko/kakezu/pdflist.html>にて公開）。雅世（1390-1452、展示 No.3）・雅親（1417-1491）・雅康（1436-1509）・雅俊の飛鳥井家当主4代にわたる資料で、末柄豊氏が全点の書誌情報・解題・翻刻を公表されている（「東京大学教養学部所蔵『飛鳥井家和歌関係資料』」）。

今回展示する資料の一つが、室町幕府8代将軍・足利義政（1436-1490）による「肩ぬく鹿」についての質問に答えるこの書状草案である。「肩ぬく鹿」とは大江匡房（1041-1111）の詠「かぐ山のははかが下に占とけてかたぬく鹿は妻恋なせそ」（『堀河百首』等）に現れる歌語である。以下、訂正箇所を整除しつつ私意に漢字を宛て、雅俊の返答を確認したい。

肩抜く鹿事。万葉注十四巻歌など失ひ候て、所持候はず候。天照太神岩屋いばやに御籠りの時、香具山の鹿を生きながら肩を抜きて、骨を焼きて占をせし様ある事ともにて候か。「武蔵野のうらへかたやき」など詠み候か。いかさま鹿の肩の骨を焼きて、香具山の木のはゝかの木を根越して焚いて、骨を焼きけると候か。大方斯様の事にて候。万葉注釈御本候は、自然御覽候へきか。若奥義抄二のに載せ候かと存候て、大概披見候へとも不見



1485年の雅俊書状草案（第2紙紙背）

候。此由御心得候て、御申入候へく候。

匡房の歌は、アマテラスが天岩戸に隠れたとき、鹿の骨を抜いて「ははか」（ウワミズザクラ）で焼いて占ったという『古事記』にもみえる内容を踏まえる。天岩戸神話を語る時匡房の歌を引用する『太平記』のような事例もあるので、歌書の蒐集に熱心だった義政にとっては、当たり前知識だったと思われる。

「武蔵野の…」とは『万葉集』巻14の歌「武蔵野尔 宇良敞可多也伎 麻左弓尔毛 乃良奴伎美我名 宇良尔 但尔家里」（むざしのに うらへかたやき まさでも のらぬきみがな うらにでにけり）を指す。この歌の注として天岩戸神話を挙げる例は、『和歌童蒙抄』（12世紀半ば）などの歌学書にある。しかし雅俊はそれらを発見できず、『詞林采葉抄』（1366以前）のような万葉注釈をみれば分かる、と回答したのだろう。この答えに義政は何を感じたであろうか。

この草案は、1485年（文明17）の書状草案の裏面に記されている。翌年に義政は雅俊の叙位を祝う和歌を贈っており、若い雅俊と晩年の義政との交流について知る上でも、本資料は興味深い。

【参考文献】 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期』（風間書房、改訂新版1984）。小川剛生『武士はなぜ和歌を詠むか—鎌倉将軍から戦国大名まで』（角川選書572、KADOKAWA、2016、初出2008）。末柄豊「東京大学教養学部所蔵『飛鳥井家和歌関係資料』」（『東京大学史料編纂所紀要』第19号、2009）。小川剛生『中世和歌史の研究』（塙書房、2017）。（佐藤 嘉惟）

文久元年露船対州碇泊中の日記

展示 No.6

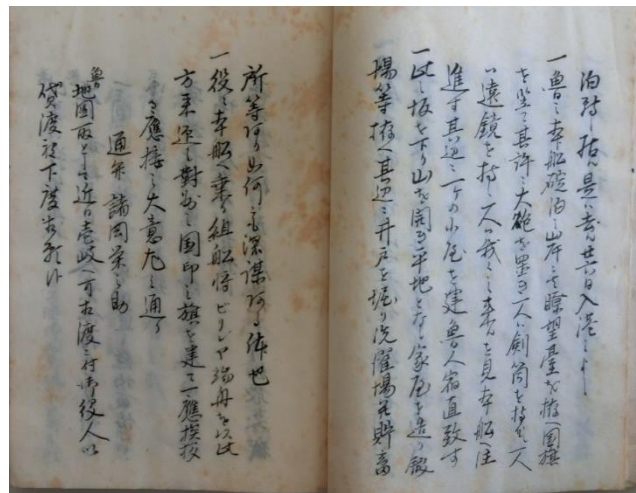
〔年次不明〕 写 1冊

文久元年(1861)に対馬で起きた「ポサドニック号事件」の事態収拾に立ち会った唐通事何礼之助(1840-1923)によって綴られた日記の写し。

ポサドニック号事件は1861年2月からロシア軍艦ポサドニック号が対馬占領を企て滞泊した事件で、幕末期における最も重要な外交問題の一つである。当時ロシアとイギリスは世界の覇権を巡って各地で争っていた。東シナ海と日本海を繋ぐ位置にあった対馬は、東アジアへの進出を狙う両国にとって戦略的要衝であった。ポサドニック号が対馬浅茅湾に来航し、船体修理を名目として芋崎に上陸して小屋を建設し、土地租借を要求したのはこうした情勢下の出来事だった。幕府による退去要請に応じなかったロシア側であったが、同年7月、英公使オールコックの協力の下英艦が派遣され撤退勧告がなされると、対馬問題の外交問題化を避けるために同地から引き揚げていった。

本史料の著者何礼之助は、1840年に長崎で生まれ、唐通事を勤め、開国後には英語を武器に活躍した人物。1863年に長崎奉行支配定役格となり幕臣に取り立てられ、1867年には開成所教授職並に任じられた。維新後は、開成所御用掛・造幣局権判事・大阪洋学校督務などを勤めたのち、1871年、岩倉使節団に一等書記官として参加。帰国後は、内務省の記録課翻訳事務や条約改正調査のための外務省出頭、台湾蕃地事務局御用掛などを経て、内務大書記官にまで昇進している。後年、元老院議員・勅撰貴族院議員にもなった。

東大史料編纂所には何礼之助に関する1862年から1921年までの史料群や1867年から1923年古写真が、御子孫の何俊郎氏の寄贈により2015年から所蔵されているが、本史料は1861年のものであり、



ロシア人との緊張感あふれる対峙 (14丁裏・15丁表)

○原文

泊致し居ルは去ル廿六日入港之よし
 一 魯之本船碇泊之岸ニは瞭望台を拵へ国旗を竖て其許ニ大砲を置き一人ハ劍筒を檢分し一人ハ遠鏡を持し一人ハ我々之来ルを見本船へ注進す其辺ニ一ケの小屋を建魯人宿直致す

一 此之坂を下り山を開き平地となし家屋を造り鍛場等拵へ其辺ニ井戸を掘り洗濯場并貯畜所等あり如何ニも深謀ある体也

一 役々本船へ乗り組船將ビレリヤ端舟を以此方來迎し対州之國印之旗を建て一応挨拶す 應接之大意左之通り

通弁 諸岡榮之助
 魯 地図取として近日老岐へ可相渡ニ付御役人以貸渡被下度相願候

○傍線部の訳文

一 ロシアの本船が停泊する岸には見張り台を造り、国旗を立て、その下に大砲を置き、一人は劍筒を持ち出し、一人は望遠鏡を持ち、一人は我々が来るのを見て、本船に急いで報告する。その辺りに一軒の小屋を建て、ロシア人が宿直する。

一 この坂を下り、山を開いて平地にし、家を造り、鍛冶場を建設し、その辺りに井戸を掘り、洗濯場と貯蔵庫などあった。いかにも深く計画した様子である。

学内では最も古い内容の記録と言える。『海軍文庫圖書分類目録』(和漢書ノ部)ではC160 海事関連書に分類され、第一高等学校時代に本学に搬入されたと考えられる。

日記の内容は何礼之助が対馬に向かう少し前の7月12日から10月2日に長崎に帰帆するまでの記録であり、ロシア人との緊迫した様子のほか対馬の自然の美しさが綴られる。

(田中 希望)

絵本京白粉 5冊中2冊存

展示 No.8

1805（文化2）年刊2冊

歌舞伎興行においては、芝居の内容と出演者を宣伝・告知するために各種の番付が出されており、上演台帳（台本）と合わせて、歌舞伎研究には欠かせない資料となっている。ここで紹介する「絵尽し」は、上方の劇場で刊行された番付の一種であり、江戸では「絵本番付」と呼ばれる。今日でいうプログラムやパンフレットに相当し、吹抜屋台を模した画面に芝居の各場面を描いて登場人物の周囲に役名・役者名および簡素な説明文を書き添えている。台帳が現存しない芝居の内容を知るためには、この絵尽し・絵本番付が有力な手がかりとなることが多い。

絵尽しは興行期間中に観客向けに販売されたもので、本来はその場限りの出版物であるが、安永から文化頃（1772-1818）、過去に刊行された複数の絵尽しを合綴して再板し、慰み用の絵本として販売することがあった。本書『絵本京白粉』もその一つで、寛政・享和年間（1789-1804）の絵尽しを収録し、京の書肆八文字屋八左衛門から1805年に全5冊が刊行された。しかし現存が確認されているのは黒木文庫の2冊と、東京大学総合図書館青洲文庫（渡辺沢次郎旧蔵）の3冊、同図書館秋葉文庫（秋葉芳美旧蔵）の1冊のみである。青洲本のうち1冊は黒木本と、1冊は秋葉本と重複しているため、全学の蔵本を合わせても、なお1冊が欠けている。

黒木文庫の2冊と秋葉文庫の1冊には、いずれも「養閒齋蔵書記」の印記がある。つまり同一のコレクションから分かれたものが、別々の経路を経て、再び東京大学に入ったのである。この蔵書印は善本に多く見られるが、印主は判明していない。一方、青洲文庫の3冊には蔵書印がない代わりに、落書きが多く、子供向けの絵本として親しまれた様子が見られる。



左) 絵尽し『假名手本忠臣蔵』1丁表



右) 斧定九郎と与市兵衛を演じる四世市川團蔵（2丁裏～3丁表）

ちなみに、今回展示する『假名手本忠臣蔵』絵尽しは、電子版黒木文庫の書誌情報では1797（寛政9）年11月京早雲長太夫座のものとされているが誤りで、狂言建ても配役も異なる。『歌舞伎絵尽し年表』において1798（寛政10）年4月京四条南側芝居とされているのが正確であろう。この興行は『歌舞伎年表』には載っていないが、本絵尽しによって、四世市川團蔵（1745-1808）が高師直・加古川本蔵・大星由良助・斧定九郎・与市兵衛の五役を演じたことがわかる。なかでも定九郎と与市兵衛の早替りは、今日の舞台でも用いられる演出の一つである。

【参考文献】 土田衛「上方歌舞伎前期絵尽し攷」（『考証元禄歌舞伎一様式と展開一』所収、八木書店、1996。[初出]『愛媛大学法文学部論集 文学科編』2号、1970）。須山章信・土田衛 [編]『歌舞伎絵尽し年表』（桜楓社、1988）。渡辺守邦・後藤憲二 [編]『増訂新編蔵書印譜』（青裳堂書店、2013-2014）。（川下 俊文）

金剛頂一切如来真実摂大乘現証大 教王経 3巻 巻第三存

展示 No.24

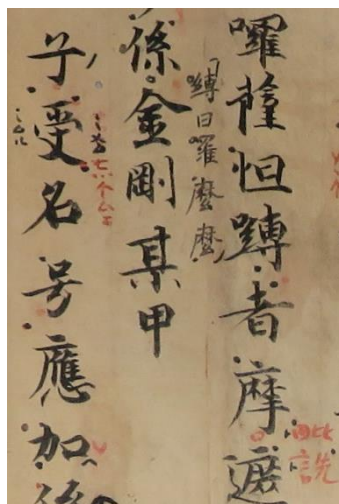
〔平安時代後期〕 写 1軸

密教の根本的な経典として重視される漢訳仏典（不空訳、以下『金剛頂経』と略称）の写本で、院政期の訓点を伝える資料。本来一揃だった同経の巻第二が九州大学附属図書館に所蔵されている。

日本における密教は、唐から空海によって本格的に伝えられ、金剛界・胎藏（界）の二つを一組とした世界観のもとで教理・実践が深められた。金剛界とは、すべての煩惱を打ち砕く力としての大日如来の智の側面を指し、『金剛頂経』が根本的な経典である。三巻構成の『金剛頂経』のうち教養学部所蔵の巻第三では、大日如来の悟りの世界を模した空間（曼荼羅）へ弟子を引き入れて教えを授ける灌頂儀礼のほか、種々の真言や印の結び方などが説かれている。

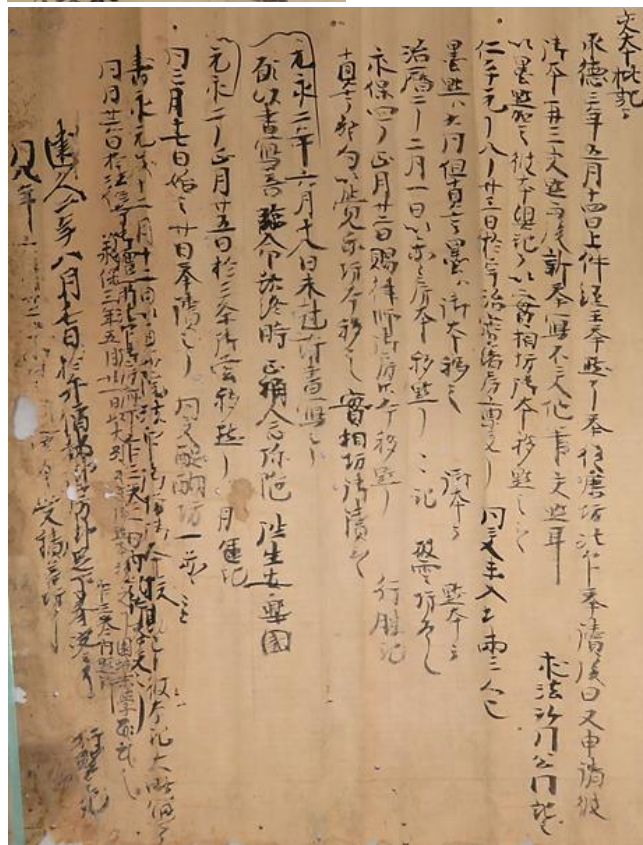
日本では一般に、漢文で記された文章を読むために訓読をする必要があり、その手がかりとして、訓点と総称される読み仮名・送り仮名やヲコト点・返点などの記号が用いられてきた。本資料に加えられた訓点は、^{おんじょうじ}園城寺（三井寺とも。現滋賀県大津市）を主な拠点とした天台宗寺門派の僧侶によるものと、真言宗の僧侶によるものの2種に大別されるという。

本資料末尾の識語には、11世紀半ばから12世紀末にかけての年号（治暦・承保・永保・承德・元永・仁平・寿永・建久）がみえるが、年代順には配列されていない。訓点を校訂したという識語に続けて、そのとき見比べた本に書かれた識語を記したためであろう。識語にみえる僧名・坊名は、頼豪（1005-1085）、行勝（1049-1124）、公円（1053-1105）、行聖（1168-1233）など、その多くを院政期から鎌倉初期にかけての寺門派僧に比定できる。識語の大部分は顕運（?-1203）が記したと考えられるが、末尾の2行分は行聖によるもの。その他、筆者を特定しがたい箇所も存する。詳細については書誌の項を参照されたい。



左) 写真1行目には朱で「毗訖」と補入され、2行目には「囉日囉麼麼」と墨で補入される。3行目の「受」には、「シメム」（右傍・墨）「シムル」（左傍・墨）「サツケムニ」（右下・朱）と3種の訓が示される。（第4紙～第5紙）

下) 識語（第15紙）



本資料は1962年（昭和37）8月23日に古書肆の思文閣から購入された。九州大学附属図書館所蔵本は1964年に古書肆の弘文荘より購入された由で（九州大学附属図書館の山根泰志氏のご教示による）、分蔵された経緯は未詳である。

【参考文献】 築島裕『平安時代訓点本論考』（研究篇、汲古書院、1996）。小林芳規『後期訓読語体系』（平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究5、汲古書院、2013）。

（佐藤 嘉惟）

※識語の翻刻にあたって慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫の高橋悠介氏よりご教示を賜りました。記して御礼申し上げます。

二教論勘文

展示 No.25

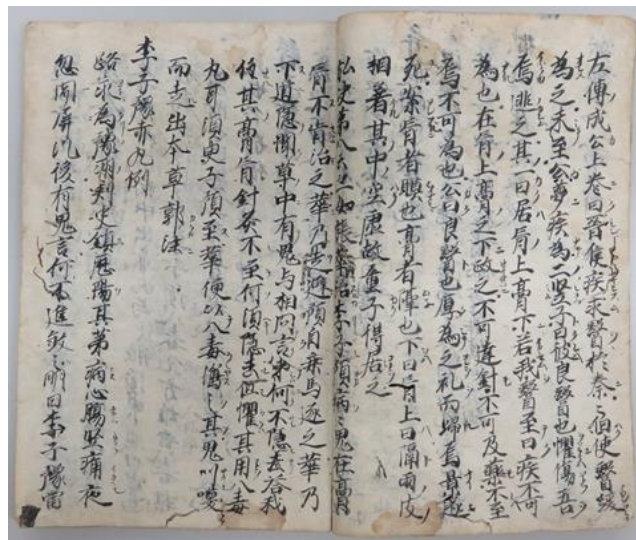
1156 (久寿3) 写1帖

空海の『弁頭密二教論』について、『玉篇』などを引用しつつ注釈した書。奥書に「久寿三季四月廿八日於勤修寺本堂後戸／書写了」とあり、1156(久寿3)年の書写と見られる。『弁頭密二教論』には写本に加え高野版などの刊本も存在するが、本書と同内容の書物が他にあるかは不明。

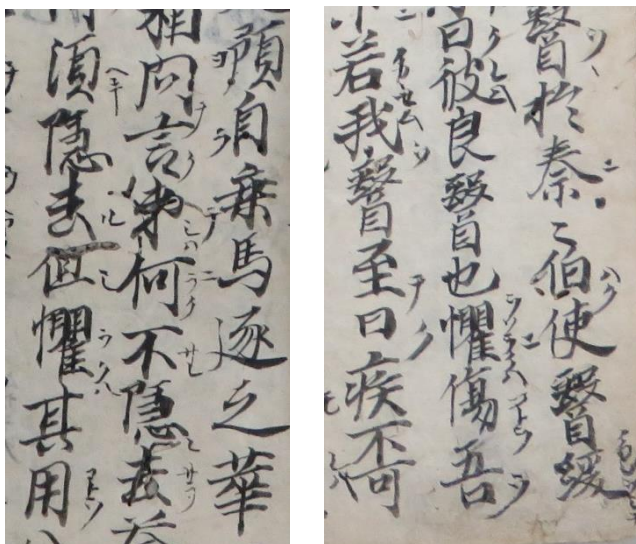
1962 (昭和37)年6月15日に教養学部が弘文荘より購入したことが帙に捺された印記からわかる。

『弘文荘待賈古書目』には索引やDVD-ROMによるかぎり掲載されていないが、同年5月に日本橋白木屋で催された古書展の『善本精選一万点古書籍大即売フェア—出品目録』に、和本類八〇三番として「辨頭密二教論勘文〈久寿三年写／カナ点〉」とあり、購入のきっかけになったと思われる。本書は院政期の訓点資料として注目され、翌年刊行された築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』に5箇所にもわたって本書の訓点が引用されている。すなわち、「所以(ユヘナリ)」(5丁裏)、「孰(タレカ)」(10丁裏)、「焉(イツカカ)」(3丁裏)、「第何(シハラク)」(4丁表)、「不(サレ)」(4丁表)の5例である。引用には「東大教養学部蔵二教論勘文久寿三年(一一五六)点」との注記が付されている。訓点には墨と朱によるものがあるが(朱書は別筆で、後補と思われる)、全41丁のうち、前半の18丁分にとどまる。

小学館の『日本国語大辞典』には、初版・第2版ともに「おそらくは」の初出例として、『二教論勘文』の一節、「懼(ヲソラクハ)われを傷(そこなふ)ことを」が掲出されている。その出典注記には「二教論勘文久寿二年点(1155)」とあるが、該当箇所の本文および訓点は本書(3丁裏)と一致することから、あるいは「久寿二年」は「久寿三年」の誤りではなかろうか。



3丁裏・4丁表。



右) 3丁裏 (拡大)「ヲソラクハ」の訓が見える。

左) 4丁表 (拡大)「シハラク」の訓が見える。

本書の来歴について、森銚三による帙の書題簽には「石山寺旧蔵」とある。本自体にはそれをうかがわせる蔵書印などはないが、『平安遺文』題跋編の2147号に「二教論勘文〈一帖〉」とあって、近江石山寺の所蔵(聖教第二九箱)とされる。

(田村 隆)

色葉口伝・古今集真名序

展示 No.26

1592 (天正 20) 写 1 帖

「いろは歌」の仏教的な意味を秘伝として説く注釈書の『色葉口伝』と、『古今和歌集』の真名序が合写された、中世末期の資料。

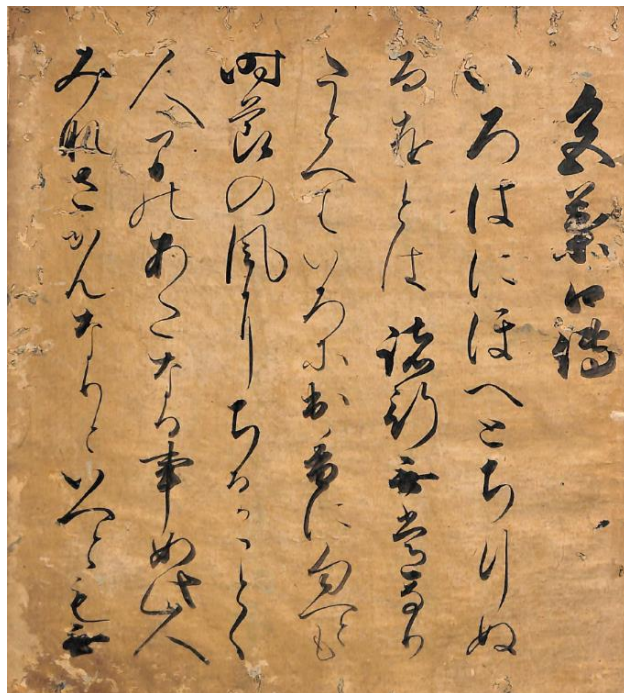
中世において「いろは歌」は『大般涅槃経』にみえる四句偈(偈とは韻文のこと)と下のように対応させられ、無常を説くと一般に理解されてきた。現在知られる「いろは歌」47字の末尾に「京」を加えて48字とするのも、中世の通例である。

いろはにほへと ちりぬるを = 諸行無常
 わかよたれそ つねならむ = 是生滅法
 うみのおくやま けふこえて = 生滅滅已
 あさきゆめみし 糸ひもせす = 寂滅為楽

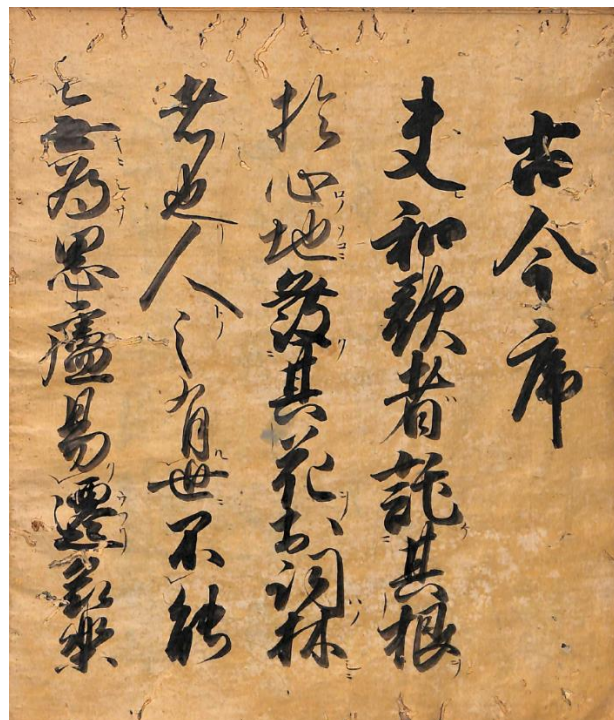
こうした背景を踏まえると、同時期の他の「いろは歌」注釈が経文などを引用しながら秘説を展開するのに比べれば、『色葉口伝』の説く仏教的な内容はごく一般的なものといえる。秘伝とされる説は、48字の「いろは歌」と『仏説無量寿経』にみえる阿弥陀如来の四十八願を結びつけるというもの。和歌や物語などはすべて仮名から生じており、そうした文芸の営みが、人々を救おうとする阿弥陀如来の誓願(=四十八願)に適う、とされる。類似の説は、中世の他の「いろは歌」注釈にも確認できる。

古今集真名序は、初めて天皇の命で編纂された和歌集『古今和歌集』(905年奏覧)の漢文で書かれた序文。その内容は、和歌が人の心から発するという説や、和歌の歴史・役割などである。すべての文芸は仮名から生じるという『色葉口伝』との関連から、合わせて書写されたのであろうか。

奥書の記すところによれば、「逍遙院殿」つまり古典に通じた公家の三条西実隆(1455-1537)の本に基づいて、春勢という僧侶が写した本。青蓮院流の優美な筆跡であり、たんに秘伝を書き留めるといふ以上



色葉口伝冒頭部 (1 丁表)



古今集真名序冒頭部 (7 丁裏)

の役割(貴人の鑑賞など)を期待された書物だったと考えられる。

本資料は1962年(昭和37)6月15日に古書肆の弘文荘より購入された。『弘文荘待買古書目』第24号(弘文荘、1954)、『善本精選一万点古書籍大即売フェアー出品目録』(文車の会、1962)に載る。『二教論勘文』(展示No.25、ピックアップ参照)とともに見繕われ、教養学部に入ったものであろう。(佐藤 嘉惟)

清俗紀聞 13 卷

展示 No.28

1799（寛政 11） 刊 6 冊

寛政年間に長崎奉行を勤めた中川忠英^{なかがわただてる}（1753-1830）を中心に編纂された清代の中国南部の風俗についての記録。中川から編纂の命を受けた近藤重蔵ら海外事情調査に長じた幕吏は、長崎の唐通事（中国語通訳官）を通して長崎に渡来した清国商人から情報を問いただし、具体的な絵図を交えながら和漢混淆文で記した。

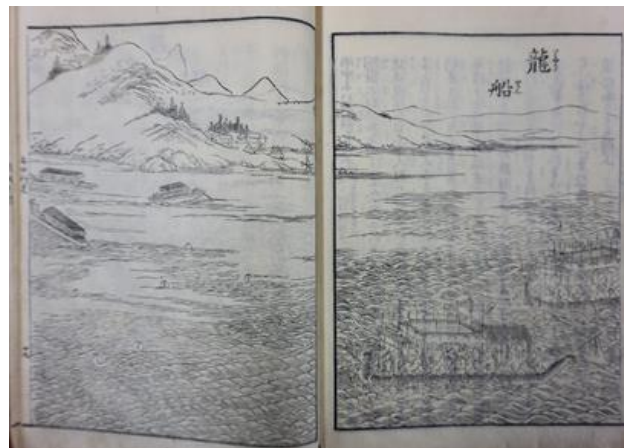
本書の構成を以下に示す。

- 第一冊 礼帙（巻一年中行事）
- 第二冊 楽帙（巻二居家）
- 第三冊 射帙（巻三冠服、巻四飲食、巻五閩学）
- 第四冊 御帙（巻六生誕、巻七冠礼、巻八婚礼）
- 第五冊 書帙（巻九賓客、巻十羈行李、巻十一喪礼）
- 第六冊 数帙（巻十二祭礼、巻十三僧徒）

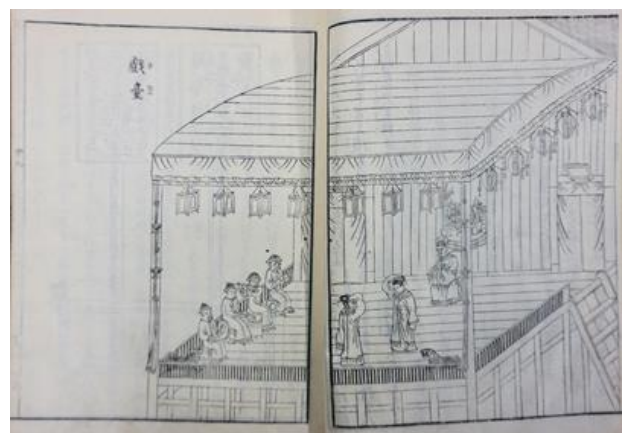
中川は長崎奉行でありながら、幕府の隠密も勤めた。彼は身分を問わず、近藤重蔵や間宮林蔵などの能吏をとりたて、幕府の情報部的性格を兼ねた機関を作り上げた。『清俗紀聞』は、当時の長崎の幕吏が密貿易や海外渡航の禁を犯した疑いのある漂流民の取り調べるための基礎資料として編纂されたとも言われる。

長崎に来航する中国人商人の出身地は、明代は福建省が中心であったが、清代になると浙江・江蘇も加わった。こうした事情から、清俗紀聞に記述描画されている風俗文物は福建・浙江・江蘇風が複合した性質のものである。それは、当時の北京一帯の風俗が「満州風」と呼ばれたことに対して、古い江南の漢民族の風俗を固く守る「唐宋遺風」と評価されるものである。『清俗紀聞』に数多く記載されている陶磁器・文房具・書籍など中国の雑貨は、江戸時代の文化人の唐様好みとも結びついている。

また、寛政年間は浮世絵の黄金時代であり、『伊勢



竜船（巻一）：端午前後に行われるボートレース。日本には江戸初期に伝わり、ペーロンとして親しまれる。（第1冊 27 丁裏・28 丁表）



戯台（巻十二）：天后聖母の祭日には、豪家富民が施主として芝居を開催し、廟門外の広場に戯台を設け芝居を献じた。（第6冊 15 丁裏・16 丁表）

参宮名所図絵』など絵図入り地理案内書が盛んに作られた。『清俗紀聞』の刊行はそののやりの波にも乗っていたとも考えられる。

現在教養学部所に所蔵される『清俗紀聞』は、巻首の刊記によると、1799 年（寛政 11）8 月、東都書林金蘭堂から刊行された初刻本であると見られる。巻 13 の末に「窃恩館蔵版」という印が捺されるが、監修者の中川忠英の書斎の堂号であると推測される。また本書が 1950 年（昭和 25）11 月 10 日に本郷赤門前の木内書店の主人であった木内誠（1882-1953）から 650 円で購入されたことも判明している。

【参考文献】 中川忠英（著）孫伯醇・村松一弥（編）『清俗紀聞』（東洋文庫 62、平凡社、1966）。山本巖「清俗紀聞考」（『宇都宮大学教育学部紀要 第 1 部』1994.3）55～68 頁。反町茂雄『紙魚の昔がたり 明治大正篇』（八木書店、1987）。（藤 子君）

展示品キャプション一覧

1 朱子語類 140 巻

1771 (乾隆 36) 刊 40 冊
第一高等学校

朱子学の大成者朱熹 (1130-1200) の門人との問答録。朱子学は母国中国の他、朝鮮、そして日本にも浸透したが、これは 1771 年に王朝の命により朝鮮で刊刻されたもの。かなりの大判であることが特徴である。大正期以後に第一高等学校に搬入されたと見られる。1939 年の『第一高等学校六十年史』には稀覯書として紹介されており、重視されていたことが分かる。(高原 智史)

2 校友会雑誌 第二百二十七号

1903 (明治 36) 刊 1 冊
第一高等学校校友会。1903 (明治 36) 年刊。
附録として「明治卅六年自二月至四月増加図書」と、図書館の新着図書リストが載せられている。(高原 智史)

3 応永二十六年和歌詠草

1419 (応永 26) 写 1 軸
第一高等学校

1419 年の勅題和歌を飛鳥井雅世 (1390-1452) が写したものの。おそらく後小松上皇 (1377-1433) の出題であろう。定められた 8 つの題に沿って、御製・明魏・宋雅と 1 首ずつ詠まれている。明魏とは花山院長親 (?-1429)、宋雅とは雅世の父・飛鳥井雅縁 (1358-1428)。題は和歌の伝統的な部立では夏・恋・雑にあたるが、夏 3 首は前後が切られて継がれている。No.4 とともに 1936 年 (昭和 11) に古書肆の巖松堂から購入。(佐藤 嘉惟)

4 和歌懐紙土代・肩拔鹿事

〔室町時代後期〕 写 1 軸
第一高等学校

飛鳥井雅俊 (1462-1523) による和歌懐紙の草案 (土代) と書状草案を 1 軸に仕立てたもの。今回展示するのは足利義政 (1436-1490) の「肩ぬく鹿」についての質問に答える書状の草案。アマテラスが天岩戸に隠れたとき鹿の骨を抜いて「ははか」(ウワミズザクラ) で焼いて占ったという『古事記』などにみえる内容を踏まえるが、はかばかしい回答はできていない。1485 年 (文明 17) の書状草案の裏面に記される。(佐藤 嘉惟)

5 肥後日向大隅薩摩四州図

1877 (明治 10) 刊 1 折
第一高等学校 海軍文庫旧蔵

修史館によって編まれた南九州を中心とする地図。所々朱書により点や線が記されている。枠外に「第百八十三号 朱

線ハ十年八月七日マテノ戦線ナリ」とあるので、おそらくは西南戦争の戦線を記録したものであろう。書入は大分・宮崎方面に集中している。海軍文庫の旧蔵資料は駒場図書館にも遺され、その一部は現在「大日本海志編纂資料展」として駒場博物館において展示中である (12 月 2 日まで)。本図の複製パネルが大分県立先哲史料館の「日本の近代と大分の先哲一時代と地域を創り出した人々」展において展示中 (10 月 6 日～11 月 25 日)。(田村 隆)

6 文久元年露船対州碇泊中の日記

〔年次不明〕 写 1 冊

第一高等学校 海軍文庫旧蔵

1861 年 (文久元)、ロシア軍艦ボサドニック号が対馬に永住施設を建て永久租借権を要求した「ボサドニック号事件」が起こった。本日記は唐通事、何礼之助 (1840-1923) がこの事件の事態収束に立ち会った際のものの写し。ロシア人との緊迫した様子のほか対馬の自然の美しさも綴られる。『海軍文庫圖書分類目録(和漢書ノ部)』の海事関連書に分類されており、本学には第一高等学校時代に搬入されたと見られる。(田中 希望)

7 東海道四谷怪談 (辻番付)

1825 (文政 8) 刊 1 冊

東京高等学校 (黒木文庫) 河竹能進旧蔵

歌舞伎『東海道四谷怪談』初演時の辻番付 (今でいうポスター)。この時は興行を初日・後日に分け、初日は『仮名手本忠臣蔵』前半と『東海道四谷怪談』前半、後日は『忠臣蔵』後半と『四谷怪談』後半、最後に大切として『忠臣蔵』討入を出す、という変則的な取り合わせを行った。今回の展示は後日のもの。旧蔵者は河竹黙阿弥門下で、明治初期に上方で活躍した歌舞伎狂言作者の河竹能進 (1820-1886)。(川下 俊文)

8 絵本京白粉 5 冊中 2 冊存

1805 (文化 2) 刊 2 冊

東京高等学校 (黒木文庫) 養閒齋 (本名未詳) 旧蔵

『絵本京白粉』は寛政・享和年間 (1789-1804) の京の歌舞伎絵尽しを 5 冊に編集し、1805 年に再板したもので、総合図書館青洲文庫・秋葉文庫にも端本がある。今回展示するのは歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』の絵尽しで、1798 年京四条南側芝居上演。忠臣蔵の七役早替りを考案した四世市川團蔵 (1745-1808) が主演で、今回は五役を演じていることがわかる。特に、殺人犯定九郎と被害者与市兵衛の早替りが見どころ (図録参照)。(川下 俊文)

9 仮名手本忠臣蔵

1748 (寛延 1) ~ 1755 (宝暦 5) 刊 1 冊

東京高等学校 (黒木文庫)

義太夫節浄瑠璃正本。竹田出雲・並木千柳・三好松洛合作、1748 年大坂竹本座初演。赤穂事件を題材とした人形浄瑠璃の代表作であり、歌舞伎にも移入されて好評を博し、こ

れ以降の赤穂義士劇に絶大な影響を与え、数多くの外伝を生んだ。黒木文庫は4種の七行本を蔵するが、本書はその中でも最古の版。刊記は失われているが、神津武男氏の分類によれば、1755年以前刊行の「大坂再刻本」に該当する。(川下 俊文)

10 東海道四谷怪談

〔年次不明〕 写 8冊

東京高等学校(黒木文庫)

歌舞伎台帳の写本。四世鶴屋南北(1755-1829)作、1825年江戸中村座初演。『仮名手本忠臣蔵』の世界に、御先手組同心田宮家に起こったとされる怪談を取り入れ、『忠臣蔵』と表裏一体をなす外伝として作られた。塩冶(浅野)家浪人民谷伊右衛門の悪行と、女房お岩の亡霊の祟りを中心に、直助権兵衛の主殺しと近親相姦、小仏小平の亡霊の忠義を描く。本書は初演時台帳に基づくが、書写情報なし。

(川下 俊文)

11 東結緘旅路花嫁

1799(寛政11) 刊 1冊

東京高等学校(黒木文庫)

常磐津節浄瑠璃正本。義太夫節『仮名手本忠臣蔵』第八「道行旅路の嫁入」の改作。1799年、江戸中村座で歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』的一幕として初演。大星力弥(大石主税)に嫁入りするため東海道を上る娘小浪と、母戸無瀬との道行に、原作にはない奴・歌比丘尼・鹿島の事触れがからんで、華やかな舞踊劇となっている。

(川下 俊文)

12 梁塵愚案抄 2巻

〔江戸時代中期〕 写 1冊

東京高等学校(黒木文庫)

神楽歌と催馬楽の歌詞について注釈を加えた書。神楽歌は宮中の神事芸能である御神楽で歌われたもので、催馬楽は日本古来の歌謡を雅楽風に編曲したもの。「日本無双の才人」とも称えられた公家の一条兼良(1402-1481)が歌学書などに基づく注釈を加えており、現代の研究に至るまでの影響力を持つ。本資料は全体の構成などの点でNo.13のような版本に近いが、校合注記や注釈の異説も記されている。

(佐藤 嘉惟)

13 催馬楽註秘抄

〔江戸時代中期〕 写 1冊

東京高等学校(黒木文庫) 秋山恒太郎旧蔵

『梁塵愚案抄』(No.11,13)の下巻部分にあたる催馬楽の注釈書。上巻部分にあたる『神楽註秘抄』とともに、雅楽を主な職掌とした公家の綾小路有俊(1419-1495)の依頼で成立した。構成や注釈内容に『梁塵愚案抄』と異なる点がある。本資料の奥書には1455年(康正元)に有俊が記した内容のみが伝わっている。黒木文庫以前の所蔵者は、不羈齋こと、東京師範学校校長も務めた秋山恒太郎(1832-?)。

(佐藤 嘉惟)

14 梁塵愚案抄 2巻

1689(元禄2) 刊 2冊

東京高等学校(黒木文庫)

江戸時代に『梁塵愚案抄』は寛文版・元禄版等が出版されて流布したが、これは元禄の版本。No.11、12のような写本と異なり、「或説云」という形で異説を記していない。本資料の版本の作られた年代は元禄だが、印刷されたのはそれよりも時代が下る。

(佐藤 嘉惟)

15 おくのほそ道

1789(寛政元) 刊 1冊

東京高等学校(黒木文庫)

芭蕉の弟子である素龍・去来・蝶夢がそれぞれ跋を記して1770(明和7)年に刊行した本を、1789(寛政元)年に再刊したもの。併せて展示する待鳥文庫本とともに一帙収められている。請求記号が共に「4124」であり、異なる文庫でも東京高校内で同一書目として整理していたことがうかがえる。

(田村 隆)

16 おくのほそ道

〔江戸時代後期〕 刊 1冊

東京高等学校(待鳥文庫)

井筒屋版の後印本。黒木文庫本、待鳥文庫本の冒頭部分を展示した。一見すると同じ版面に思われるが、実は黒木文庫本(寛政元年刊)はかぶせ彫りで(先に刊行された版本を版下にして新たに彫り直すこと)、両者を見比べると「月」の2画目、「栖」の運筆などに違いが見える。

(田村 隆)

17 四季物語

〔江戸時代後期〕 写 1冊

東京高等学校(待鳥文庫) 吉野隆平旧蔵

鴨長明(1155?-1216)に仮託された室町時代末期の随筆。兼好法師『徒然草』第138段に「鴨長明が四季物語にも、「玉垂に後の葵はとまりけり」とぞ書ける」とあり、長明の随筆は存在していたようだが、現存する『四季物語』は『徒然草』に基づいて著されたもの。旧蔵者の吉野隆平は、帝国大学でも教えた国学者・黒川真頼(1829-1906)に師事した人物。展示資料に他の写本との異同を朱で書き入れている。

(佐藤 嘉惟)

18 東関紀行

1648(正保5) 刊 1冊

東京高等学校(待鳥文庫)

中世三大紀行文の一つ。正保板本である本書は作者を鴨長明とするが、現時点では作者不明。1242年(仁治3)8月に京都を発って鎌倉に至り、2ヶ月の滞在を経て帰途に就くまでに目にした折々の光景や景物、情趣について、故事や古歌が多く引かれながら記される。本書冒頭と待鳥清九郎校注本冒頭と見比べると、待鳥が本書を用いて『東関紀行』の校注を付けたこと、蔵書印はその後に押されたことがわかる。

(田中 希望)

- 19 東關紀行（要註国文定本総聚）
1929.1 刊 1 冊
東京高等学校（黒木文庫）
待鳥清九郎校注。廣文堂、1929 年（昭和 4）刊。
（田中 希望）
- 20 海道記 2 卷
1664（寛文 4） 刊 2 冊
東京高等学校（待鳥文庫）
中世三大紀行文の一つ。寛文板本である本書は作者を鴨長明とするが、作者未詳。立身出世を諦めて遁世した主人公は 1223 年（貞応 2）4 月に京都を発って鎌倉に至り、5 月には帰京の途に就く。道中での光景や景物、情趣を描写するだけでなく、この旅を通して仏教への信仰心が深まった胸中を吐露するなど単なる紀行文に止まらない作品と言える。『海道記』はしばしば『東関紀行』と混同された。
（田中 希望）
- 21 山水会旅行記
1953～1959 写 1 軸
教養学部
「山水会」は教養学部の国文・漢文学系教員の集まりの名で、今日まで続いている。本書は 1953～1959 年の旅行記で、当時の教員による短歌や俳句が載る。2014 年に国文・漢文学部会の書庫で見出され、巻子に表装した。展示箇所には「犬山城主成瀬君新任披露宴也」とあるが、「成瀬君」とは日本近代文学が専門の成瀬正勝氏（1906-1973）のことで、後に教養学部図書館長も務めた。第 23 代犬山城主、犬山成瀬家第 11 代当主。
（田村 隆）
- 22 源氏物語 葵・賢木
1953（昭和 28） 刊 1 冊
東京大学教養学部山水会編。矢島書房、1953（昭和 28）年刊。
（田村 隆）
- 23 南山歌集
1949（昭和 24） 刊 1 冊
杉先生喜寿記念歌集出版会編。私家版、1949（昭和 24）年刊。
（田村 隆）
- 24 金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王經 3 卷 卷第三存
〔平安時代後期〕 写 1 軸
教養学部
密教の根本的な經典の一つ。「金剛頂經」「真實撰經」とも略称され、すべての煩惱を打ち砕く大日如来の智の側面（金剛界）などを説く。展示資料全体に経文の訂正や訓点の書入がみられ、多くは園城寺（現滋賀県大津市）を拠点にした天台宗寺門派の院政期の僧たちによると考えられる。1962 年（昭和 37）8 月 23 日に古書肆の思文閣から購入。九州大学附属図書館には本来一揃だった巻第二が蔵される。
（佐藤 嘉惟）
- 25 二教論勘文
1156（久寿 3） 写 1 帖
教養学部
『二教論』は『弁頭密二教論』のことで、頭教と密教の違いを説いた空海の著作。その抜書に注釈を施した「勘文」に訓点が付されている。1962（昭和 37）年 6 月 15 日に教養学部が弘文荘から購入したもの。訓点資料として注目され、翌年に刊行された築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』に 5 箇所において本書の訓点引用されている。院政期の書写で、戦後に教養学部に入った古典籍を代表する本の一つと言える。
（田村 隆）
- 26 色葉口伝・古今集真名序
1592（天正 20） 写 1 帖
教養学部
『色葉口伝』は「いろは歌」に仏教的な注釈を加えたもの。さして難解な議論は展開されず、当時としては一般的な内容が多い。合写されている『古今和歌集』（905 年奏覧）の真名序（漢文で書かれた序文）は、和歌が人の心に発することなどを述べる。展示資料は古典学に通じた公家の三条西実隆（1453～1537）の本に基づき、春勢という僧侶が書写した。1962 年（昭和 37）6 月 15 日に古書肆の弘文荘から購入。
（佐藤 嘉惟）
- 27 新板琉球人行列記
1832（天保 3） 刊 1 冊
教養学部 佐古慶三旧蔵
1832 年の江戸上りを紹介する板本。使者の名前や行列の挿絵、琉球ことばなどが載る。1609 年の島津氏侵攻以来、将軍の代替わりごとに慶賀使、琉球国王の代替わりごとに謝恩使が琉球から江戸に派遣された。1832 年は琉球国王尚育の即位を将軍に感謝するための謝恩使で、正使は豊見城王子、副使は沢岬親方であった。教養学部になってから購入。
（田中 希望）
- 28 清俗紀聞 13 卷
1799（寛政 11） 刊 6 冊
教養学部
寛政年間に長崎奉行を勤めた中川忠英を中心に編纂された、清代の中国南部の風俗についての記録。現在教養部に所蔵。1950 年（昭和 25）11 月、木内書店の主人であった木内誠（1882～1953）から購入されたものであることが判明している。
（藤 子君）

25 二教論勘文 (請求記号ナシ)

綴葉装 久寿三(一一五六) 写一帖

二三・五×一五・五糎。表紙なし。焦茶色の紙で背の部分を含む。左斜刷毛目(丁字引) 書題簽「二教論勘文」。内題なし。三折(七・八・六枚)。墨付四二丁。片面八行。一行一八〜二二字程度。奥書「久寿三季四月廿八日於勸修寺本堂後戸／書写了」(一行目の「書写了」を抹消して「本堂後戸」と上書。「書写了」は二行目に記す)。印記「東大教養学部図書印」(朱方陽)、「東大教養学部図書」(朱丸陽)、「月明莊」(朱方陽)、「弘文莊」(朱方陽)(帙)。「顕密二教論勘文／久寿三年古写本／石山寺旧藏」(田村 隆)

26 色葉口伝・古今集真名序 (請求記号 八二二二六)

綴葉装 天正二〇(一五九二) 写一帖

二二×一八・一糎。紺色表紙。左肩金泥地書題簽「色葉口伝 古今口」。内題「色葉口伝」 「古今序」。斐紙。三折(四・四・二枚)。墨付一九丁。片面七行。一行一二字前後・字高一八・〇糎(色葉口伝)、片面五行。一行八字前後・字高一七・五糎(古今序)。奥書「右以逍遙院殿御本写之／畢尤可為秘藏者也／天正廿年晚秋十一日法橋春勢書之」。印記「東大教養学部図書印」(朱方陽)、「東大教養学部図書」(朱丸陽)、「月明莊」(朱方陽)。帙挿入。帙題簽に「色葉口伝 附古今真名序 天正二十年古寫本」。帙に印「弘文莊」(朱方陽)、および受人情報。表紙に「一六五三」の貼紙。(佐藤 嘉惟)

27 新板琉球人行列記 (請求記号 二二六・二)

袋綴 天保三(一八三二) 刊一冊

二二・一×一五・六糎。紺色表紙。中央(絵入)「新板琉球人行列記」。内題なし。全一 九丁。四周单边(二〇・三×一五・六糎)。刊記「干時天保三年辰十月未朝／薩州御出 入方(印)「叔■改」朱方陽)／御免 取次判元 伏見箱屋町 丹波屋新左エ門／同下板 橋 兼春市之丞／京都書林 寺町通錦小路上ル 菱屋弥兵衛(印)「■檢」黒方陽)」。印記「東大教養学部図書印」(朱方陽)、「SACCO 希式」(朱丸陽、佐古慶三蔵書印)、「東 大教養学部図書印」(朱方陽)、「東大教養学部図書」(朱丸陽)、「詞」(朱方陽)。裏見

返に一九九五年三月二八日付の納入覚書(高尾彦四郎)あり。(田中 希望)
28 清俗紀聞 十三卷 (請求記号 二二三N・二・一a) f)

袋綴 寛政一一(一七九九) 刊六冊

二七・二×一八・八糎。灰色表紙。題簽欠。雷文梓副題簽(刷)に卷名、ただし副題簽も 剥落している第一・六冊は朱筆打付書。内題「清俗紀聞(卷之一〜十三)」。全丁数(四二・ 七五・四八・三八・五三・四五)。四周单边(二一・一×一五・七)。片面二一行。刊記「寛 政十一年己未八月新鑄／東都書林／本石町四丁目大横町／堀野屋仁兵衛(印)「翫月堂記」 朱方陽)」。各冊に印記「考芸館図書記」(朱方陽)、「消」印を捺す、「東大教養学部図書印」 (朱方陽)、「東大教養学部図書」(朱丸陽)。第六冊のみ「富塚村岩田喜平扣」(朱方陽) あり。(藤 子君)

卷子本 (平安時代後期) 写一軸

ツレが九州大学附属図書館に所蔵(巻第二、ウェブ上の目録「九大コレクション」には「金剛頂瑜伽經」と載る)。紙高二七・五糎。無軸。表紙なし。題簽なし。外題打付書「金剛頂經第三」。内題「金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經第三」。尾題「金剛頂瑜伽經卷第三」。全一五紙(一紙長…五一・七、五三・五、五三・七、三三・三、一五・六、五四・三、五四・一、五四・一、五四・二、五四・一、五四・一、五四・一、五三・九、五四・〇糎)。有界(界高二三・二糎)。一行一八字程度。奥書は次の通り。

交本批記云

^(一〇九九) 承徳三年五月十四日上件經王奉点了奉從唐坊法印奉讀後日又申請彼

御本再三交点而後新奉写不交他筆交点耳 求法沙門公円記之

以墨点加之彼本奥記云以実相坊御本移点之云々

仁平元一^(一一五)八月廿三日於宇治宝渚房粟交了 同交未入土西三人也

墨点ハ^(天)同但真言墨ハ御本移之 御本云 点本云

治曆二^(一〇六)二月一日以乘々房本移点了、記 披雲坊有之

永保四^(一〇八四)一正月廿二日賜律師御房御本移点了 行勝記

真言声句以覚乗坊本移之実相坊御読云々

元永二^(一一七)年六月十八日未尅許書写之了

願以書写善 臨命路終時 正称念弥陀 往生安樂國

元永二^(一一七)一正月廿五日於三条御堂移点了 月運記

同三月十七日始之廿日奉讀之了 同交醜翻坊一乘、云々

寿永元^(一一八)歲十二月十二日以真如院法印御房御本校勘了了彼本記大略写了

同月廿六日於法住寺御壇所法印御房座下三卷一日内題許奉受之了

承保三年五月廿一日以大^(一〇七六)御点本移之了園城末学^(カクヘ)之

乍三卷内題許

^(一一九) 建久二年八月十七日於弁僧都御房御足下奉受之了 行聖記

^(一一七) 同八年六月廿二日(読めず) 奉受積善坊了

元永二年奥書への線の書入は、六月・正月・三月と並ぶものを時系列に正す意か。承徳三年く寿永元元年の奥書までは一筆か。承保三年奥書、建久年間の奥書は、それぞれ別筆。なお寿永元年一二月二六日奥書は、朱で一八字程度書かれた文言を擦消した上に書かれる。印記「東大教養学部図書印」(朱方陽)、「東大教養学部図書」(朱丸陽)。箱入。包紙あり。ヲコト点は四種【参考】欄文献参照)、声点・付訓・校合(朱・墨筆)の書入あり。仮名字体は院政期頃のもの。本文・界線を削去した訂正箇所あり。

※僧名・坊名の比定に関して

古点本にしばしばみえる「実相坊」が頼豪(一〇〇五・一〇八五)である旨はすでに指摘されており、寺門派僧の中で絞り込むことができる。今回は主に国立公文書館内閣文庫所蔵『三井寺灌頂脉譜』(請求番号一九三・〇一〇五、以下『脉譜』)を使用して僧名の特定を行った。まず奥書に僧名が記された公円・行勝・行聖は『脉譜』に見出せる。次に【参考】欄の文献では「円運」と翻刻されてきた人物を、『脉譜』に依拠することで「宝錯坊」「宝塔坊」などとされる勝運(一〇九三・一一五七)だと特定できる。『脉譜』に記された勝運の坊名は「宝渚坊」の誤記であると推測され、仁平元年奥書の「於宇治宝渚房」も勝運のことと考えられる。治曆二年・永保四年・元永二年の奥書は、それぞれ仁平元年に校合した本の奥書であろう。また、九州大学附属図書館所蔵の巻第二(以下、九大本)奥書にみえる顕運(?・一一二〇三)の坊名は、『脉譜』によって「積善坊」だと確認できる。九大本では、宝渚坊(すなわち勝運)↓「貞如院御本」↓顕運という伝流が確認でき、本資料の寿永元年までの奥書の筆者が顕運だと推測できる。(佐藤 嘉惟)

【参考】築島裕『平安時代訓点本論考』(研究篇、汲古書院、一九九六)。小林芳規『後期訓読語体系』(平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究5、汲古書院、二〇一三)。

なし。全五四丁。無辺無界。丁付「ヲク一」五十四終（除第五三丁）、五四丁表に「ヲク四十九」。片面八行。一行二二一六字程度。字高一・四一。一種。刊記「京寺町二条上ル町／井筒屋庄兵衛板」。印記「東京高等学校／一七二一七／蔵書番号」（紫方陽）（見返）、「待鳥文庫」（朱方陽、篆書体）、「東京高等学校図書之印」（朱方陽）、「待鳥文庫」（朱方陽）、「伝神」（朱方陽）、「東京高等学校」（朱丸陽）、「玄微」（朱方陽）、「是印」（朱方陰）、「■」（朱方陽）、「齋■」（朱方陰陽混在）。五四丁裏に薄墨・篆書体で「白川関」と記す。五〇～五四丁にかけて版心近くに破れあり。裏表紙の反故紙は文字・黒印がみえる。黒木文庫本と待鳥文庫本を一帙に収める。（田村 隆）

17 四季物語 （待鳥文庫 請求記号 三六二・七）

袋綴 （江戸時代後期） 写一冊。

二四・三×一六・七糎。後補丹色表紙。中央書題簽「鴨長明四季物語」。内題なし。墨付六〇丁。片面一一行。一行二〇字程度。字高一八糎。奥書「日野山陰長明書」、「右一部十二卷者鴨長明所撰之四季／物語也日々々々雖求之被秘于箱中／被封於蔵裏無入手裏偶依懇望之自／官庫潜取出之写之畢今度之撰中之規模宝用有之而已尤可秘者也／応安元年戊申十一月十六日 藤原為定写之」、「長明四季物語十二卷我家之袖玉／不可越之者也尤可伝子孫秘本也／永享十年九月下旬 中納言藤原雅世」、「南大路長明四季物語十二冊自仁和寺／御門主依御恩荷拝写之又他日以官本／令校合備再写者也我文憲之重財不可／如之案長明之筆痕多是写清紫二女貫業二仙之詞花者歟疑是可謂抽／凡骨焉雖然詞源章段出処不詳読／之如失途後学補之最多幸焉云尔／永禄元年十二月上旬 三好伯陽軒長慶書写」、「右長明四季物語以一写本対校互有得失他日俟善本欲再校之矣／明治三十八年十月廿三日夜 吉野隆平識」（朱書）。印記「吉野隆平蔵書」（朱方陽）、「待鳥文庫」（朱方陽）、「東京高等学校図書之印」（朱方陽）、「東京高等学校蔵書番号」（紫八角陽）、「伝神」（朱方陽）、「東京高等学校」（朱丸陽）、「玄微道人」（朱方陽）、「玄微」（朱方陽）、「是印」（朱方陰）。「玄微道人」印は吉野隆平奥書に隣接して捺されるものの、「玄微」・「是印」印は裏見返に「南保氏蔵」と書入れた直下に捺され

る。全体にわたって朱による校合書入あり。（佐藤 嘉惟）

18 東関紀行 （待鳥文庫 請求記号 四一七・四二）

袋綴 正保五（一六四八） 刊一冊

二六・三×一六・八糎。灰色表紙。左肩双边書題簽「長明道記」。内題なし。虫損修補あり。全二八丁。四周单边（一九・六×一四・四）。白口、柱「長明」丁付「一」廿八」。片面一一行。刊記「正保五戊子歳夾鐘中旬 三条菱屋町林甚右衛門板」。印記「待鳥文庫」（朱方陽）、「東京高等学校図書之印」（朱方陽）、「東京大学図書」（朱方陽）、「東京高等学校蔵書番号一七五七八」（青八角形陽・インク）、「東京高等学校」（朱丸陽）。

19 東關紀行（要註国文定本総聚） 省略 （佐藤 嘉惟）

20 海道記二卷 （待鳥文庫 請求記号 四一七・六八）

袋綴 寛文四（一六六四） 刊二冊

二六・三×一七糎。黒色雷文繫地牡丹唐草文艶出表紙。左肩双边刷題簽「長明海道記（上下）」。内題「鴨長明海道記」。虫損修補あり。全丁数（三七・三三）、上冊に行丁・乱丁あり。四周单边（二〇・三×一三・九）。白口、柱「海（上・下）」、丁付「一」十二、十、十四、十六、十七、十五、十八、三十四終（上）、「一」三十三終（下）。片面一〇行。奥書「此海道記始而一読之時則命／書生加校合求得他本可改而已／慶長三年季秋中澣／丹山隱士玄旨在判」刊記「寛文四年辛辰曆十一月吉日／飯田忠兵衛板行」。印記「待鳥文庫」（篆書体、朱方陽）、「待鳥文庫」（朱方陽）、「東京高等学校図書之印」（朱方陽）、「東京高等学校蔵書番号一七六四五」（青八角形陽・インク）、「東京高等学校」（朱丸陽）。拵映入。帙題簽「長明海道記」。上冊、一七～二〇丁にかけて丁付の書入あり。（佐藤 嘉惟）

21 山水会旅行記 省略

22 源氏物語 葵・賢木 省略

23 南山歌集 省略

道よつやくわいたん 伍」「東海道よつや怪談 六」「東海道四谷くわいたん しち」。内題「当ル西の盆狂言／東海道四谷怪談」。墨付丁数(四一・三一半・一七・五三丁半・一六半・三七・三二・二九)。片面一二行。一行一九〜二四四程度。字高二一糎。奥書なし。各冊に印記「黒木文庫」(朱方陽、楷書)、「東京高等学校図書之印」(朱方陽)、「東京高等学校」(朱丸陽)。拵紙入。帙題簽に「東海道四谷怪談」。電子版黒木文庫で全丁画像公開。(川下 俊文)

11 東結緘旅路花嫁 (黒木文庫 請求記号 四一三三・五〇)

仮綴 寛政一一(一七九九) 刊 二冊合一冊

二五・五×一七・四糎。題簽なし。外題「仮名手本忠臣蔵／八段目道行／東結緘旅路花嫁」。内題「東結緘旅路花嫁」。虫損補修あり。表紙二枚・本文二丁。無辺無界。片面一〇行。一行三四〜四二程度。字高一八・四糎。刊記「正本／板元／せともの町／南がわ／村山源兵衛」。印記、上冊に「福田」(朱丸陽)、下冊に「東京大学図書印」(朱方陽)。拵紙入。帙題簽に「常磐津寄本」。最終丁裏に朱書「享和九年三月」。(川下 俊文)

12 梁塵愚案抄 二卷 (黒木文庫 請求記号 四一三一・四)

袋綴 (江戸時代中期) 写 一冊

二六・六×一九・四糎。縹色表紙、押八双あり。左肩黄土色書題簽「梁塵愚案抄」。内題「梁塵愚案抄(巻上・巻下)」「下は「抄」」。墨付四八丁。片面一二行。一行二七字程度。字高二二・六糎。奥書なし。印記「東京高等学校」(青丸陽)、「黒木文庫」(朱方陽)、「東京高等学校図書之印」(朱方陽)、「東京高等学校」(朱丸陽)。拵紙入。帙題簽に「梁塵愚案抄」。(佐藤 嘉惟)

13 催馬楽註秘抄 (黒木文庫 請求記号 四一三一・五)

袋綴 (江戸時代中期) 写 一冊

二五・九×一九・二糎。後補紺色表紙。もと仮綴・本文共紙表紙。中央書題簽「催馬楽註秘抄」。内題「催馬楽註秘抄」。楮紙打紙。墨付二六丁。片面二行。一行二七字程

度。字高二一・七糎。奥書「右催馬楽秘註借筆於中院黄門以正本／令書写度々校合入落字等尤可為証本矣／康正元年九月尽／権中納言有俊」。印記「東京高等学校」(青丸陽)、「不羈齋図書記」(朱方陽)、「黒木文庫」(朱方陽)、「東京高等学校図書之印」(朱方陽)、「東京高等学校」(朱丸陽)、「宝印」(朱方陽)。拵紙入。帙題簽に「催馬楽註秘抄」。表紙・原見返に戯書あり。(佐藤 嘉惟)

14 梁塵愚案抄 二卷 (黒木文庫 請求記号 四一三一・六)

袋綴 元禄二(一六八九) 刊 二冊

二二・八×一六・一糎。香色麻葉文繫(刷)表紙。左肩双辺刷題簽「[新板]梁塵愚案抄(上・下)」「[下]字剥落」。内題「梁塵愚案抄(巻上・巻下)」。全丁数(二五・二三)。四周単辺(一八・七×一三・二糎)。白口単黒魚尾、柱「梁塵(上・下)」。片面一二行。刊記「元禄二巳巳年九月中旬 大坂心齋橋南壹丁目 書林 松村九兵衛梓」。各冊に印記「東京高等学校」(青丸陽)、「黒木文庫」(朱方陽)、「東京高等学校図書之印」(朱方陽)、「東京高等学校」(朱丸陽)。拵紙入。帙題簽に「梁塵愚案抄」。後印本。(佐藤 嘉惟)

15 おくのほそ道 (黒木文庫 請求記号 四一二四・五)

袋綴 寛政元(一七八九) 刊 一冊

一六・六×一四糎。鳥の子色水藻唐草表紙。中央刷題簽「おくのほそ道」。内題なし。全五七丁。無辺無界。本文丁付「ヲク一〜五十二」。片面八行。一行二〜一六字程度。字高一四・四糎。刊記「寛政元年西仲秋再板／諧仙堂 蔵板／洛陽蕉門書林 井筒屋庄兵衛／橋屋治兵衛／浦井徳右衛門」。印記「東京高等学校」(一二四六七) 年月日(空欄)、「紫丸陽)、「黒木文庫」(朱方陽)、「東京高等学校図書之印」(朱方陽)、「松濤」(朱方陽)、「東京高等学校」(朱方陽)、「東京高等学校」(朱方陽)。黒木文庫本と待鳥文庫本を一帙に収める。(田村 隆)

16 おくのほそ道 (待鳥文庫 請求記号 四一二四・一九)

袋綴 (江戸時代後期) 刊 一冊

一六・七×一四・一糎。鳥の子色水玉表紙。中央雷文繫刷題簽「おくのほそ道」。内題

掘り肥後日向ハ県図天保図等ヲ参シテ之ヲ製ス／一 熊本鹿児島市街之図ハ曲尺一寸八分一里、州南諸島ハ凡本図八十五分十ヲ以テ之ヲ別載ス／明治十年五月 修史館。

印記「海軍事務局」(朱方陽)、「海軍図書之印」(朱方陽)、「中央文庫／陸甲三七八号一」

(朱方陽)、「甲三七八」「二」は墨書。「三七八」は墨線で抹消)、「海軍省軍事部文庫印」(朱方陽)。表紙に「乙」丸印二種、「枚」印あり。「古地図十六種」の帙の中の一点。

(田村 隆)

6 文久元年露船対州碇泊中の日記 (海軍文庫 請求記号 C I 六〇)

袋綴 (年次不明) 写一冊

二三・九・一六・七種。橙色表紙。左肩書題簽「文久元年露船対州碇泊中の日記何礼之助」。内題なし。全五四丁、墨付五三丁。片面七行程度。奥書なし。印記なし。請求記号は「C一六〇」が正しいか。

(田中 希望)

【参考文献】木村直也「近世の日朝関係とその変容」(関周一(編)『日朝関係史』吉川弘文館、二〇一七)。史料編纂所所蔵史料目録データベース「長崎唐通事何礼之関係史料」。麓慎一「ポサドニック号事件について」ロシア海軍文書館所蔵 04100212385 を手掛かりに(『東京大学史料編纂所研究紀要』一五、二〇〇五)一八九〜一九六頁。

7 東海道四谷怪談 (辻番付) (黒木文庫 請求記号 九六三・一五)

折本 文政八(一八二五) 刊一冊。

三〇・四・二二・五種。茶色子持格子表紙。中央書題簽「東京番付 (座全堂／所蔵)」。

内題なし。全番付九八枚、表紙見返一枚、裏表紙見返一枚。刊記「板元せともの丁村山源兵衛正」(四谷怪談初演後日)。印記「下寺町通生玉南新道滝之前河竹能進」(朱方陽)、「河竹」(朱亀甲陽)、「能進」(朱方陽)、「河竹能進」(朱楢田陽)、「黒木文庫」(朱

方陽、楷書)、「黒木文庫」(朱方陽、篆書)、「東京高等学校図書之印」(朱方陽)、「東京大学図書印」(朱方陽)、ほか判読不明印二種あり。拵映入。帙題簽に「東京番付」

「江戸辻番付」。ほとんどの番付に朱筆で上演年月を書入れる。電子版黒木文庫で全丁画像公開。

(川下 俊文)

8 絵本京白粉 五冊中二冊存 (黒木文庫 請求記号 九六三・二五・二六)

袋綴 文化二(一八〇五) 刊二冊

二二・五・二五・九種。暗青色表紙。左肩刷題簽「絵本京白粉 (哥舞妓狂言／大寄集)」。内題なし。全丁数(二二半・二三半)。四周双边(各絵尽二丁表のみ)、四周单边(一七・五・二・九種)。刊記「つる屋喜右衛門／八文字や八左衛門 板」「八文字屋八左衛門板元」「八左衛門板元」「八文字屋八左衛門板」「八文字屋八左衛門板」「大坂心さ いばし塩町角 本屋清七板」「寺町通二条上ル町 つる屋喜右衛門」「八文字屋八左衛門板元」。印記「養閒齋蔵書記」(朱方陽)、「黒木文庫」(朱方陽、楷書)、「東京高等学校図書之印」(朱方陽)、「東京高等学校」(朱丸陽)。拵映入。帙題簽に「絵本京白粉 二冊」。電子版黒木文庫で全丁画像公開。

(川下 俊文)

9 仮名手本忠臣蔵 (黒木文庫 請求記号 四一四二・一二三)

袋綴 寛延元(一七四八)〜宝暦五(一七五五) 刊一冊

二二・二・一五・八種。柿渋色表紙(ただし大部分が剥落)。題簽なし。外題打付書「仮名手本忠臣蔵」。内題「仮名手本忠臣蔵」。全九九丁。無辺無界。片面七行。一行三〇字前後。字高一九・六種。刊記「寛延元年辰八月十四日 作者 竹田出雲／三好松洛／並木千柳」。印記「黒木文庫」(朱方陽、楷書)、「東京高等学校図書之印」(朱方陽)、「東京高等学校」(朱丸陽)。拵映入。帙題簽に「仮名手本忠臣蔵」。表紙に「天保九歳 戊七月／渋谷氏、裏表紙に「本(二字抹消)／今里／利兵衛、見返に「御台(以下欠)／はやく／御かへし／被下候(以下欠)」と書入れ。九九丁裏に「(渋谷)抹消 大先生」、裏見返に「松平大和守」など落書きあり。電子版黒木文庫で全丁画像公開。

(川下 俊文)

【参考】神津武男『『仮名手本忠臣蔵』の諸本』(『京都語文』第五号、二〇〇〇)

10 東海道四谷怪談 (黒木文庫 請求記号 四一四三・一〇・一八)

袋綴 (年次不明) 写八冊。二四・四・一六・六種

春色役者家紋散らし表紙。外題打付書「東海道四谷怪談(巻・式・参・四・八)」

「東海

展示品書誌

※東京大学OPACの登録番号の書入、請求記号の貼紙等の記述は省略する。

※原則通行の字体を使用することとし、虫損箇所は「□」難読箇所は「■」と表記する。

1 朱子語類 百四十巻 (一)高文庫 請求記号 一・ろ・61(2)

袋綴(五針眼訂法) 乾隆三六(一七七二) 刊 三九冊

袋綴(五針眼訂法) 「年次不明」写一冊(第二四冊)

三七・四×二四・〇糴。黄色出繫艶出表紙。汚損。外題打付書「朱子語類(一〜四十)」。

内題「朱子語類」。全丁数(一〇九・九一・一一〇・一二六・九三・一一七・一〇三・八九・一〇五・九二・一二六・一〇七・八八・八九・九四・一一二・一一七・一一一・一〇〇・一〇一・一四〇・一一三・一〇八・一一〇・九〇・一〇五・一一九・一〇九・一一三・一一二・七五・八五・八一・一〇五・一〇九・七三・九九・一〇二・一一一・一一二)。四周双边有界(二四・八×一八・四糴)。片面一〇行注文双行。一行二字。白口单花口魚尾。無刊記。第二四冊は四周双边有界(二五・四×一八・七糴)白口单花口魚尾の野紙に鈔写(行数字数同前)。各冊に印記「第一高等学校図書印」(朱方陽)、「第一高等学校図書閲覧室用」(朱方陽)。第二四冊を除き「金鍾秀印」(朱方陽)「清風」(朱方陰)を有す。多くの冊に表紙裏文書あり。第二四冊表紙裏には活版の印刷物も含まれる。(高原 智史)

【参考】以下の論文注五〇に書誌あり。藤本幸夫「朝鮮版『朱子語類』攷」(『富山大学人文学紀要』第五号、一九八一)。

2 校友会雑誌 第百二十七号 省略

3 応永二十六年和歌詠草 (一)高文庫 請求記号 十・い・4(63)

卷子本 応永二六(一四一九) 写一軸

紙高三一・〇糴。頭切軸。後補黄色表紙。外題打付書「雅一卿賢筆和歌詠草(端云/夏曉風)」。外題「世」字右傍「縁御筆歟可考」と墨書。内題なし。裏打あり。全五紙(一紙長::三・五、五〇・一、三・一、四六・五、四七・八糴)。字高二六・五糴。奥書「応永廿六年五月十八日以 勅題/耕雲禅師飛鳥井黄門禅門詠進之/天覧以後被出。印記「第一高等学校図書印」(朱方陽)。箱舩入、題「雅世卿賢筆和歌詠草」(東京大学OPAC登録名と同じ)。包紙あり。(佐藤 嘉惟)

【参考】以下に書誌・解題あり。末柄豊「東京大学教養学部所蔵『飛鳥井家和歌関係資料』」(『東京大学史料編纂所紀要』第一九号、二〇〇九)。

4 和歌懐紙土代・肩拔鹿事 (一)高文庫 請求記号 十・い・4(67)

改装卷子本 「室町時代後期」写一軸

紙高三一・五糴。後補龍文蠟箋表紙。見返は金の切箔を散らす。外題打付書「雅一卿御筆(御詠草/肩拔鹿事)」。内題なし。裏打あり。全二紙(一紙長::三一・五、四三・九糴)、いずれも紙背文書あり。奥書なし。印記「第一高等学校図書印」(朱方陽)。箱舩入。「雅俊卿御筆御詠草肩拔鹿事」(東京大学OPAC登録名と同じ)。包紙あり。「飛鳥井家和歌関係資料」のうち、本資料と同様の表紙・見返を有する「雅親卿賢筆女房奉書御会始題者書付」(十・い・4(65))「雅親卿雅俊卿筆古文書」(十・い・4(66))に、寛政六年(一七九四)一〇月に改装された旨の貼紙がある。本資料も同時に改装されたものか。(佐藤 嘉惟)

【参考】以下に書誌・解題あり。末柄豊「東京大学教養学部所蔵『飛鳥井家和歌関係資料』」(『東京大学史料編纂所紀要』第一九号、二〇〇九)。

5 肥後日向大隅薩摩四州図 (海軍文庫 請求記号 カ・チ・一〇)

折帖 明治一〇(一八七七) 刊一舗

七二・七×五四・四糴。折畳みの場合一八・三×一三・八糴。黄出繫表紙。中央刷「肥後日向大隅薩摩四州図」。内題「肥後日向大隅薩摩四州図」。一枚物。四周双边。刊記「一文化年中伊能忠敬実測小図ニ基キ薩隅二州及ヒ日向諸県郡ハ鹿児島県測量図ニ

展示を御覧下さった東京大学大学院総合文化研究科の月脚達彦先生から、朱子語類 (No.1) に捺された「清風」「金鐘秀印」の印主は李朝時代の官僚、金鐘秀 (1728 (英祖 4) -1799 (正祖 23)) であろうとの御指摘をいただきました。

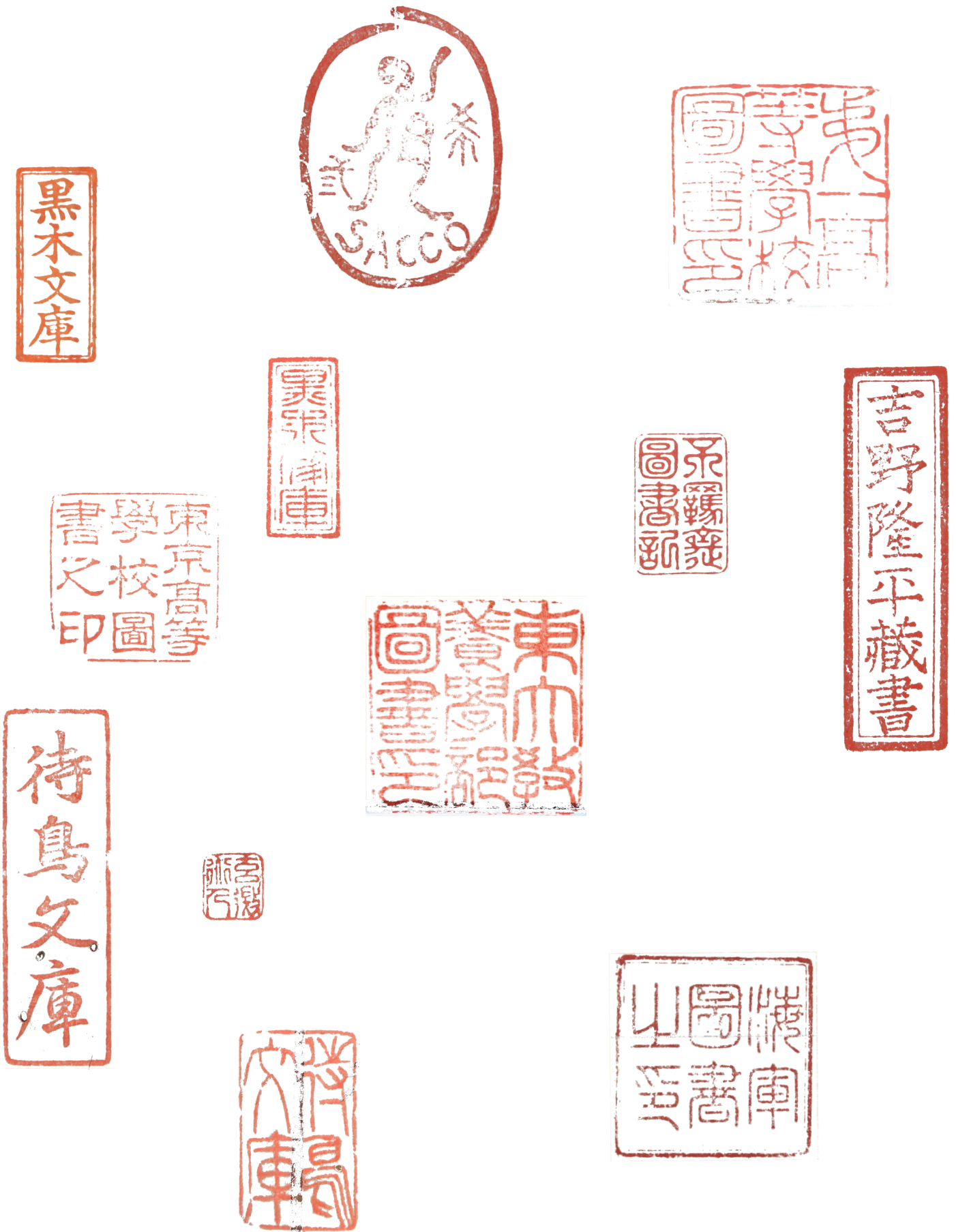
また、文久元年露船対州碇泊中の日記 (No.6) について、同研究科の渡辺美季先生に御紹介いただいた麓慎一「ポサドニック号事件の衝撃」(小松久男 [編] 『歴史の転換期 9 1861 年 改革と試練の時代』 (山川出版社、2018)) により、東京大学史料編纂所の「長崎唐通詞何礼之助関係史料」の中に本書と同内容の史料「対州表魯西船碇泊ニ付当所御組頭御目附方阿蘭陀通詞唐通詞兼学出役同所滞留中日記」(02-013) が含まれていることが判明しました。

また、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の佐々木孝浩先生から、梁塵愚案抄 (No.12) は江戸時代初期～前期の写で九条家旧蔵本の可能性があり(筆者は九条道房 (1609-1647) の右筆と推定される。石澤一志「九条家旧蔵本の行方—池田利夫「祖形本『浜松中納言物語』の写し手は誰」続々貂」佐藤道生ほか [編] 『これからの国文学研究のために—池田利夫追悼論集』 (笠間書院、2014) 等)、催馬楽註秘抄 (No.13) は江戸時代前期の写である、との御指摘をいただきました。

さらに、パンフレットを御覧下さった九州大学附属図書館の山根泰志氏から、絵本京白粉 (No. 8) に捺された「養閒齋蔵書記」の印主は、幕府医官の小野長年 (1766-没年未詳、叙法眼、号桃仙院) であることを御指摘いただきました(「九州大学蔵書印データベース」に収載)。

御教示に御礼申し上げます。

(2018 年 11 月 28 日付記)



図：展示資料の主な蔵書印

発行日 初版第4刷 2018年11月28日

発行 「駒場の古典籍」展示チーム